

❖❖ 英才教育 50 周年記念 ❖❖

第 51 回 公開研究発表会

2019
6.15

英才教育の追究

知能開発を目指した学習指導
考える力を育てる保育

発表会要項

聖徳学園小学校
聖徳幼稚園

教育目標

- 1 一人ひとりの子どもの個性を育てる
- 2 知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる
- 3 正しい心、優しい心、たくましい心を育てる

お誓い三か条

- 一、われわれは 未来をひらく戦士となり
新しい世界を 開拓します
- 一、われわれは 恥と涙をわきまえて
光明正大に 行動します
- 一、われわれは 祖国の伝統を重んじ
祖国と人類のために つくします

発表会要項

主 題 英才教育の追究

- 知能開発を目指した学習指導
- 考える力を育てる保育

- 第 77 回全国発明くふう展において
「豊田佐吉賞」受賞
- 平成 30 年度東京都児童生徒発明くふう展に
おいて 31 回目の「学校賞」受賞

幼稚園



自然体験教室



おゆうぎ会



お相撲さんとの楽しみ会



運動会

小学校



イングリッシュキャンプ



百人一首大会



校外授業2年生
国立科学博物館



スキー学校



第 51 回 公開研究発表会に当たって

～知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育～

聖徳学園小学校長 和田知之
聖徳幼稚園長

「氷が溶けたら何になる？」という問いに対して、「水になる」という答えだけではなく、「春になる」と言った柔軟な発想を大切に育てていきたいという願いで、1969 年（昭和 44 年）に、個性の伸長と知能教育を基本にした英才教育を開始しました。以来 50 年間、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育」を目指して、

- 主体的に学ぶ態度、意欲と集中力の育成
- 知能開発～創造的知能の開発と育成～
- 一人ひとりの個性と能力に応じた指導～能力の限界への挑戦～

を重点にした教育活動を重ねてきました。

●意欲と集中力の育成で知能と学力の向上

我が国では最近、小学生から大学生に至るまで学力低下の問題が話題になっています。その原因として、子どもたち自身の学習意欲と集中力の低下が大きな要因ではないでしょうか。

知能や学力の向上はもとより、子どもたちが将来社会で活躍していく上でも重要な資質は意欲と集中力になるとの考えから、私たちは幼稚園から小学校低学年までは、まず意欲と集中力の育成に重点をおいています。積極的な意欲と集中力のある子どもの場合は、仮に学校での学習時間や内容が少なくなっても、それこそ「1 教えたら 10 学ぼう」とする意欲を発揮して、自分から主体的に学習を進めていくことができ、また習得率も高くなるからです。

入園したばかりの年少児（3 歳児）の知能あそびを見ていると、一つの遊びに集中できる時間はせいぜい 15 分から 30 分程度です。なかには、教師の説明はほとんど聞

けず、周囲のことが気になり立ち歩くなど、なかなか集中して取り組めない子もいます。それが3学期頃になってくると、ほとんどの子が40分ぐらいは集中が持続出来るようになってきます。年長児（5歳児）になると、与える教材（遊びの内容）さえ適切であれば、80分間の知能あそびの時間が過ぎて昼食の時間になっても、「もっとやりたい！」言って、遊びを継続することもしばしばです。

このように幼稚園時代は、一人ひとりの子どもをよく観察していると、見違えるように意欲と集中力が身についてくることが分ります。この幼児期の3年間の成長は、小学校入学後の3年間の成長の比ではありません。特に、高学年になっても意欲と集中力が十分身についていない子どもの学習指導は、大変苦勞が伴います。ですから、私たちは幼稚園と小学校の指導上の連携を深め、3歳児から3年生ぐらいまでは、意欲と集中力の育成、つまり主体的に学ぶ態度を育てることに重点をおいているわけです。

こうした意欲と集中力を育成していくためには、日頃から授業（遊び）研究を深め、授業内容や方法に工夫が必要になることは言うまでもありません。子どもたちが授業（遊び）に意欲的に集中して取り組む条件としては、

- 学習（遊び）内容に興味・関心があること
- 難易度が適切であること
- 学習内容に発展性があること

等が重要な要素になってきます。ですから聖徳では、平素から教材研究と教材・教具の作成にはかなり力を注いでいるのです。こうして低学年の間に、意欲と集中力を育成しておく、高学年になるにつれて学力もめきめきと向上してきます。

よく聖徳学園小学校の卒業生は、中学や大学への進学実績が高いが、どのような受験指導をしているのかと言ったような質問を受けます。学校では、特別な受験指導をしているわけではありませんが、受験においても意欲と集中力、知能教育の成果は、結果的に大きなプラスになっていることは事実です。このことは、中学受験より大学受験と上級学校になればなるほど、効果を発揮しています。

●創造的知能の開発と育成

意欲と集中力の成果は、学力の向上だけではありません。創造的知能の開発と育成にも大きな成果を発揮してきます。

創造性の教育成果は、評価することはなかなか難しいのですが、一例として発明協会が毎年実施している、「東京都児童生徒発明くふう展」での成果を紹介します。聖徳では、毎年夏休み明けの9月に自由研究展を開催します。これにはほとんど全員の児童が、自分の興味・関心に基づき課題を見つけて、それについてまとめたり製作した作品を出品しています。児童によっては、小学校6年間一貫したテーマで研究を継続して取り組んでいる者もいます。この中から、校内審査を経て「東京都児童生徒発明くふう展」に該当する作品を30点（1校あたり30点までに限定）出品します。その結果、毎年20点くらいの作品が入賞し、これまで31回「学校賞」を受賞しました。そして東京都代表として全国コンクールに出品され、毎年作品が入賞しています。

こうした成果を過分に評価していただき、今までに文部科学大臣から8回目の「創意工夫育成功労学校賞」を受賞いたしました。このように、創造的知能の開発と育成では成果を挙げてきたように思っています。この創造性の開発と育成の条件を、これまでの実践結果から要約すると概ね次の通りです。

① 創造的態度を育成する

意欲・集中力・好奇心・根気・いろいろ工夫する態度等

② 個性を啓発して伸長する

③ 創造的知能を刺激し育成する

④ 直観力（直観的思考・ひらめき）を育成する

⑤ 個性と創造性を認め合える学校環境を整える

等です。本日の授業の様子から、少しでも汲み取っていただければと思います。

●個性と能力差に対応した複数指導（担任）制

子どもの個性や能力・発達段階は、一人ひとり異なることは言うまでもありません。これに対して一人ひとりにきめ細かな指導をしていくためには、まず少人数による学級編成が必要になってきます。少人数といっても、学校では子ども同士学び合い、刺激し合い、切磋琢磨しながら成長していく側面も大きいので、あまり1学級の人数を少なくすることには教育効果の上で感心しません。また、小集団でなければ、自分の力を発揮できないような子どもに育てても困るのです。

そこで聖徳では、昭和54年度から1学級の人数は30名にして、個人差が顕著な知

能訓練や数学の授業において、2人指導制を試みました。これは一つの教室に2人の指導者が入って授業を進めるわけですから、2人の綿密な連携が前提になりますが、個別学習に重点をおく知能訓練や数学の授業では、かなり効果を発揮することが明確になってきました。

現在、複数指導（担任）制を実施しているのは、

幼稚園では、学級担任 カリキュラムあそび

小学校では、学級担任 知能訓練 ゲーム 工作 数学（1～3年生）です。

また、学年が進むにつれて能力差は段々広がってきますので、数学と知能訓練では3年生から、そして国語と英語は5年生から能力（習熟度）別にクラス編成して授業を進めております。そのために、一人ひとりの子どもがゆとりを持って授業に取り組み、各自の能力の限界に挑戦することが可能になります。

本学園では複数指導（担任）制のねらいを、

① できるだけ多く（複数）の教師の眼で一人ひとりの子どもを指導する

② 一人ひとりの子どもの個性と能力差に対応したきめ細かな指導をする

この2点においています。本日の授業を通して、複数指導（担任）制の利点を見ていただけたらと思います。

以上の通り、聖徳の教育の基本的な考え方と本日の公開授業（保育）の視点を簡単にまとめておきました。私たちの趣旨を少しでもご理解いただければ幸いです。

また、本日の授業（保育）内容につきましては、「懇談会」において、意見交換していきたいと思っております。どうぞお気軽にご出席ください。このところ学校教育のあり方について関心を集めておりますが、21世紀を生きる子どもたちの健全な成長を求めて、皆さん方と共に理想的な授業のあり方を追究していきたいと考えております。本日は、ご参会いただき誠にありがとうございました。

目 次

第51回 公開研究発表会に当たって	5
発表会要項 (時程表)	11
会場案内図	14

幼稚園の指導案

◇公開保育〈9:15～10:00〉

本日の公開保育について	17
3歳児 (ほし組)「クラス活動 (知能あそび)」	18
3歳児 (はな組)「クラス活動 (造形あそび)」	21
4歳児 (そら・もり組)「造形あそび」	23
4歳児 (そら・もり組)「体育あそび」	25
5歳児 (つき組)「リトミックあそび」	27
5歳児 (やま組)「知能あそび」	30

小学校の指導案

◇公開授業〈9:20～10:20〉

1年生 (あずさ組)「知能訓練」	37
1年生 (やくも組)「国語」	41
2年生 (つばさ組)「数学」	43
2年生 (みずほ組)「知能訓練」	45
3年生 (あさぎり組)「リーダー・イン・ミー」	49
3年生 (しらさぎ組)「理科」	52
4年生 (あさま組)「地理」	54
4年生 (ほくと組)「国語」	56
5年生 (のぞみA組)「英語」	59
5年生 (のぞみB組)「英語」	61
5年生 (はやて組)「歴史」	63
6年生 (くろしお・はやぶさA組)「数学」	68
6年生 (くろしお・はやぶさB組)「数学」	70
6年生 (くろしお・はやぶさC組)「数学」	73

全体会 〈10：30～11：40〉	75
園長・校長挨拶「英才教育の成果報告」	
園児・児童発表 5歳児 斉 唱	
4年生 合 唱	
研究発表「7つの習慣」を子どもたちに ～リーダー・イン・ミーを授業に取り入れて～	
 令和元年度の研究活動計画	
研究部の活動計画	79
知能教育研究部の活動計画	81
国語科研究部の活動計画	82
数学科研究部の活動計画	83
英語科研究部の活動計画	84
理科研究部の活動計画	85
地理科研究部の活動計画	86
歴史科研究部の活動計画	87
体育科研究部の活動計画	88
音楽科研究部の活動計画	89
美術科研究部の活動計画	90
家庭科研究部の活動計画	91
研究発表会のあゆみ	93

発表会要項

1. 主 題：英才教室の追究

知能開発を目指した学習指導（小学校）

考える力を育てる保育（幼稚園）

2. 時 程

	9:00	9:15	10:00	10:30	11:40	11:50	12:30
受付 1F	公開保育（各保育室）		休憩	全体会（小学校4F講堂） 1. 園長・校長挨拶 「英才教育の成果報告」 2. 園児・児童発表 3. 研究発表 「「7つの習慣」を子どもたちに」	休憩	懇談会 ・小学校の教育（4F講堂） ・小学校の入学、入試に関する 説明会（小学校音楽室） ・幼稚園の教育（3F教室A） ・幼稚園の入園、入試に関する 説明会（3F教室B）	解散

※事前予約制です。

3. 内 容

(1) 授業公開及び保育公開

◇ 公開保育（幼稚園 9：15～10：00） ※4歳は、興味・関心に応じた選択制になっています。

年齢	組	領 域	あそび設定の視点	あそびの題目及び内容	会場	頁
3歳	ほし	クラス活動 知能あそび	ことばっておもしろい！ 考える楽しさを育む複数指導	『ものあてカルタ』 子どもの日に空を泳ぐ魚はなあに？	ほし	18
	はな	クラス活動 造形あそび	自由な表現を引き出す二人指導	お花畑を作ろう！ ～絵具の混色を楽しみながら～	はな	21
4歳	そら もり (選択制)	造形あそび	創造性を引き出す二人指導	ゆらゆら揺れるモビールづくり ～思い思いの魚を作ろう～	そら	23
		体育あそび	一人ひとりの能力を伸ばす二人 指導	動物歩きにチャレンジしよう！	幼稚園 ホール	25
5歳	つき	リトミック あそび	休符を感覚的に捉える音の聴き 分け活動	鬼太郎はどこだ？ ～休符をみつけよう～	つき	27
	やま	知能あそび	達成感を味わいながら評価力を 育む指導	『道つなぎパズル』 ～ピクチャーあてはまるピースはどれかな？～	やま	30

◇ 公開授業（小学校 9：20～10：20）

学年	組	教 科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
1年	あずさ	知能訓練	パズルを通して推理力を育て る指導	『折り込み漢字パズル』 折り方を工夫して考えよう	あずさ	37
	やくも	国 語	一人ひとりの個性に応じて、 想像した場面を膨ます授業	「けんちゃん、サッカーしな いかあ」より思い浮かぶ場面を 共有化させます。	やくも	41

学年	組	教科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
2年	つばさ	数 学	創造的知能の開発と育成を目指した指導	与えられた条件から自分のかぶっている帽子の色を考え、集中思考力を養います。	つばさ	43
	みずほ	知能訓練	言葉作りを通して、拡散思考力を育てる指導	『文字転換言葉作り』 ～文字を組み合わせてたくさん思いつこう～	みずほ	45
3年	あさぎり	リーダー インミー	一人ひとりが個性を發揮し、お互いの力で学びあう授業	仲間の考えを聴き合いながら、一つの詩について考えを深めます。	あさぎり	49
	しらすぎ	理 科	想像を創造へ導く理科教育	細工された虫メガネを通過する光の集まり方を考えます。	情報室	52
4年	あさま	地 理	一枚の地図から、創造的思考を刺激していく学習指導	一枚の地図を通して、地形的な特徴から生活をイメージしていく。	あさま	54
	ほくと	国 語	一人ひとりの個性と能力を生かした学習指導	「構えの転換」という意識を刺激し、『三段なぞ』を解く・作る。	ほくと	56
5年	のぞみ	英 語 A・B	一人ひとりの興味・関心に応じた英語教育	4つの季節を表す英語表現を身につけ自分の好きな季節や絵本の英語を言えるようにします。	A 学習室 B のぞみ	59 61
	はやて	歴 史	興味・関心を活かし創造的思考力を發揮し狙いに迫る	至誠をもって一生を貫き通した松陰の生き方を学ぶ中で物の見方・考え方を養います。	はやて	63
6年	くろしお はやぶさ (能力別 クラス)	数学A	様々な考え方をする中で、創造的知能を伸ばす学習指導	『星形N角形の頂点の和』 ～色々な方法で頂点の和を求めていこう～	くろしお	68
		数学B	工夫しながら問題解決にいたる過程で、創造的知能を伸ばす学習指導	『ウサギの増え方の考察』(フィボナッチ数) 「算盤の書」の中で紹介された「ウサギの問題」を工夫して問題解決する力を育成します。	はやぶさ	70
		数学C	試行錯誤する中で、創造的知能を伸ばす学習指導	正多面体の数には限界があることを発見し、その理由を考えます。	MP ルーム	73

(2) 全体会 (会場：講堂 10:30～11:40)

- * 園長・校長挨拶 「英才教育の成果報告」 校長・園長：和田 知之
- * 園児・児童発表 5歳児による斉唱
4年生による合唱
- * 研究発表 「7つの習慣」を子どもたちに
～リーダー・イン・ミーを授業に取り入れて～
高学年主任：古賀 有史

(3) 懇談会（会場：講堂・音楽室・3年しらさぎ組教室・6年はやぶさ組教室 11:50～12:30）

* 懇談会は、下記の四つの分科会に分かれて行います。インターネットでの事前予約制です。

分科会名	主 題		主な出席教員
幼稚園教育	本日の保育・ 授業をもとに	創造的知能の開発と育成を目指した学習指導 考える力を育てる保育 (保育内容についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。)	幼稚園担当者
小学校教育		創造的知能の開発と育成を目指した学習指導 知能開発を目指した学習指導 (教科教育についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。)	大河内教頭 知能訓練担当者 小学校担当者
幼稚園の入園に関する事	幼稚園の概要および入園についてお知りになりたい方はこちらにご出席ください。		松浦教頭 幼稚園担当者
小学校の入学に関する事	聖徳学園小学校入学についてお知りになりたい方はこちらにご出席ください。		校長 小学校担当者

* 総合案内（9:00～10:30）

6号館2F（1年やくも組前廊下）に、教職員・案内役が待機しております。教室の場所、授業案内等、ご質問がございましたら、お気軽にお声がけください。

また、本日の内容及び本学園の教育についてのご意見やご質問がありましたら、懇談会へ是非ご参加ください。懇談会はインターネットでの事前予約制です。

幼稚園の部

本日の公開保育について

本園では、「自由保育」を実施しておりますが、その主な活動は、

自由あそび

カリキュラムあそび

の2つの方法で進めています。

カリキュラムあそびは、

◇知能あそび

◇体育あそび

◇リトミックあそび

◇造形あそび

◇英語あそび

◇理科あそび

の6つのあそびがあります。

本日は、4歳児はこの6つのあそびの中から2つのあそびを設定しました。

園児は2つのあそびの内容を担当の先生より聞いて、自分の好きなあそびの方を主体的に選択して遊びます。5歳児はクラスでカリキュラムあそびを行います。

3歳児は、年齢や実態を考慮して、クラス活動の中でカリキュラムあそびを取り入れながら、進めています。

本日の活動は下記の通りです。

		9時15分～10時00分	内 容
3歳児	ほし	・クラス活動 (知能あそび)	『ものあてカルタ』 ～子どもの日に空を泳ぐ魚はなあに?～
	はな	・クラス活動 (造形あそび)	『お花畑を作ろう!』 ～絵具の混色を楽しみながら～
4歳児	そら・もり (選択制)	・造形あそび	『ゆらゆら揺れるモビールづくり』 ～思い思いの魚を作ろう～
		・体育あそび	動物歩きにチャレンジしよう!
5歳児	つき	・リトミックあそび	『鬼太郎はどこだ?』 ～休符を見つけよう～
	やま	・知能あそび	『道つなぎパズル』 ～ピッタリあてはまるピースはどれかな?～

選択の時間	9時00分から9時10分	子どもたちが、内容説明を聞いて選択します。
選択の場所	4歳児 そら組にて行います。	

クラス活動（知能あそび）指導案

9：15～10：00 於：ほし組保育室

※通常、年少組では、クラスごとに自由あそびと4つのカリキュラムあそびを行っているが、本時は、年齢や実態等を考慮して、クラス活動の中に知能的な遊びを取り入れながら進めていく。

指導者 松 浦 雅 美
久 保 千 春
飯 濱 久 美 子

1. 年齢：3歳児（ほし組）
2. あそび設定の視点：ことばっておもしろい！考える楽しさを育む複数指導
3. 教材名：ものあてカルタ～子どもの日に空を泳ぐ魚は なあに？～
4. 本時刺激される知能因子：概念で単位を集中思考する（NMU）
5. 本時のねらい：与えられた概念的なヒントから、あるひとつのものを推理することにより、概念で単位を集中思考する能力を育てる。
6. 教材について

幼かった頃の我が子と電車やバスに乗る時、よく、クイズ『冷たくて甘いおやつで、早く食べないと溶けちゃうものは、なあに？』や、なぜなぜ『9匹のトラが乗っている乗り物は、なあに？』をして遊んだ。おもちゃや絵本を持参していなくてもできる、このことば遊びは、どのような場面でも子どもが楽しく過ごせる魔法の道具だ。

ことばは、いきなり習得できるものではなく、耳や目や心で感じた情報（＝経験）が重要になってくることは言うまでもない。ちなみに、少し成長した我が子に“いちご”をお題にしたクイズの問題を聞いてみた。すると、小さい子用には『ゴマのような種がブツブツたくさん付いています。三角に似た形をしていて緑色のヘタが付いています。赤い果物です。』大人用には『採ってすぐに食べられます。牛乳と混ぜるとおいしい飲み物になります。1月～5月が美味しい季節です。』という答えが返ってきた。なるほど、生活の中から感じることを、そして経験することは大切だなと実感した。

そういった点からも、本時は、一つひとつのことばが持つ意味のおもしろさを存分に味わいながら、概念の器を広げ、考える楽しさや考える力を育てるきっかけの一つとして、与えられた概念的なヒントから、あるひとつのものを推理して答えを出す“ものあてカルタ”を行う。

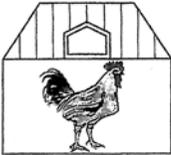
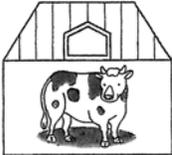
例えば「トマト」と聞いて頭に思い浮かぶものというと、何が挙げられるだろうか？“赤い・まるい・野菜売り場に並んでいる・たねがある・サラダに入っている……”など限りなく出てくる。その後、子どもたちにトマトの絵カードを見せると、それが何であるのかを正しく認知できるであろう。では逆に『赤くて丸くて上から読んでも下から読んでも同じことばの食べ物、なあに？』

と質問を投げかけたとすると、子どもたちの反応は、どうなるだろうか。“赤い→ポスト？さくらんぼ？りんご？消防車？トマト？”“丸い→さくらんぼ？りんご？トマト？”“上から読んでも下から読んでも同じことば？→トマト！”というように、与えられたヒントを手がかりにしながら推理力を働かせ、ある一つの答えにたどり着かなければならないため難しくなる。つまり認知力からステップアップした集中思考力を要求されるのである。また、この課題は、発問を耳からしっかり聞いて理解し、考えていかななくてはならないので“聞く力”も大切になってくる。集団の中で発問（話）を聞いて理解する力を、この時期からしっかり育てていくとともに、知能あそびのねらいである、楽しく遊びながら知的な好奇心や考える力（幅広い思考力）を育む活動となることを意識しながら、遊びを展開していきたい。

7. 園児の様子

入園して約2か月の子ども達は、毎日好きな遊びを見つけながら幼稚園生活を楽しめるようになってきた。自由あそびでは、電車や車、粘土、ジュース屋さんごっこ、園庭の砂場でおままごとをしたり、すべり台、アスレチック、うさぎさんの観察など、少しずつ遊びの内容が広がってきた。また、お友達の名前を覚えて少しずつ関わりも見られるようになってきた。知能あそびにおいても、好奇心旺盛な瞳を輝かせながら取り組む姿が印象的である。絵本や紙芝居を聞くことが大好きなので、本時の反応も楽しみにしている。反面、まだ年齢的なこともあって、長い時間の集中が難しかったり、いつもとは違う状況に戸惑ったりすることも予想されるので、子ども達の様子をきちんと把握し、小さなつぶやきも拾っていけるよう、複数指導の目できちんと受け止めていきたい。

8. 本時の指導過程

教材の内容及び活動	指導上の留意点
<p>1. あいさつ・出席確認</p> <p>2. 展開</p> <p>(1) 一人一枚ずつ生き物カードを持つ。 発問を聞き、その答えとなる生き物カードを持っていたら挙手をする。</p> <p>(発問例)</p> <p>① ・みなさんが飲む牛乳を出します。 ・体が白と黒です。 ・モ～と鳴きます。 なあに？</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>	<p>○出席確認をしながら、本日の健康状態等も把握する。</p> <p>T（指導者）1：発問をすべて聞いてから答えを考える等の約束事項を押える。</p> <p>T2・T3：それぞれ、子どもたちの間に入り、聞きもらしている子どもがいないか、また、理解できているかを把握し、適宜助言をする。</p> <p>T1・T2・T3：最終的に、同じ生き物カードを持った子ども達がグループになって速やかに着席が出来るように、声がけをする。</p>

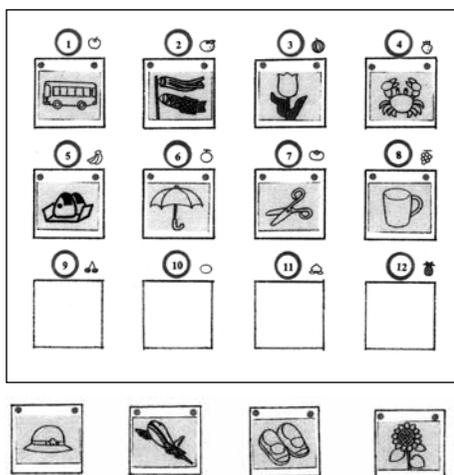
3歳児（ほし組）

(2) 一人一セットずつカードと台紙を持つ。発問を聞き、その答えとなるカードを取って、台紙の指定された箇所へはめていく。

※子どもたちが楽しく取り組めるよう、カルタとパズルを合わせた形式にて行う。(最後の答えは裏面に出てくる。)

(発問例)

- ①たくさんのお客さんを乗せて、道路を走る乗り物は、なあに？
- ②じゃんけんではグーに負けてしまいます。指を入れる穴が2つある紙を切る時に使う道具は、なあに？



3. 片づけをする。

4. おわりのあいさつをする。

T 1: (1) と同様に、発問をすべて聞いてから答えを考えるように声をかける。間延びをしないようにテンポ良く、しかし、答え合わせなどは確実にしていく。

T 2・T 3: 机間巡視をしながら、子ども達の取り組み具合を把握し、適宜助言をするとともに、T 1と連携を図る。

○すみやかに片づけられるよう、指示する。

○本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。

8. 評価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

クラス活動（造形あそび）指導案

9：15～10：15 於：はな組保育室

※通常、年少組では、クラスごとに自由あそびと4つのカリキュラムあそびを行っているが、本時は、年齢や実態等を考慮して、クラス活動の中に造形的なあそびを取り入れながら進めていく。

指導者 神山 祐希
伊奈 恵理

1. 年 齢：3歳児（はな組）
2. あそび設定の視点：自由な表現を引き出す二人指導
3. 主 題：お花畑を作ろう!!～絵具の混色を楽しみながら～
4. 主題について

幼稚園の造形あそびでは、いろいろな素材を使いながら、イメージを膨らませて作品を作ったり、表現することを楽しんでいる。一人ひとりの自由な発想を大切にしながら、子どもたちが伸び伸びとそれぞれの表現ができるような活動を目指している。本時は、子どもたちの大好きな絵具を使って、色が変わっていく様子を味わいながら、お花畑を作り上げていく。子どもたちのイメージを大切にしながら、製作活動を楽しみたい。

5. 園児の様子

4月に入園したばかりの子どもたち。幼稚園の生活にも慣れ、自分の好きなあそびを見つけて遊びながら毎日楽しく過ごしている。自由あそびの中では、ごっこあそびや粘土あそび、お絵かきを楽しむ中でイメージを膨らませて遊ぶことを楽しんでいる。そして、あそびを通して友だちと関わる姿も見られるようになってきた。造形あそびの中では、少しずつハサミを使ったりクレヨンや絵具、のりを使ったりする活動を経験して作品作りを楽しめるようになってきている。

6. 本時のねらい

絵具のスタンピングや模様、色が混ざって変わっていく様子を楽しみ、お花畑をイメージしながら個々の表現する力を引き出していく。

7. 本時の指導過程

教材の内容及び活動	指導上の留意点
1. 始まりの挨拶をする。	(2人の指導者の動き) T（指導者）1・T2：活動に入る挨拶をする。 T1：本時の活動内容を説明する。 T2：子どもたちの聞く様子を観察し、個別に声をかけながら援助する。
2. 本時の内容の説明を聞く。	

3歳児（はな組）

3. スタンピング (タンポで花に色をつける)	T 1：タンポの使い方を説明し、材料を配る。 T 2：タンポが安全に使えるよう、個別に指導しながら援助していく。 T 1・T 2：まんべんなく色がつくよう、声がけしていく。
4. 大きな画用紙にスタンピングする。 (混色を楽しみながらイメージする)	T 1：2色の絵具が混ざって、色が変わっていくことに気づけるよう、声がけする。 T 1・T 2：変わっていった色を見て、イメージが広げられるよう、何の色に見えるかなど子どもたちに聞いていく。
5. 葉っぱを作る。 (ハサミで切る)	T 1：ハサミの使い方の説明をし、配る。 T 1・T 2：ハサミを安全に使えるように指導する。
6. 飾ろう！ 出来上がったものを壁面に貼っていく。	T 1：出来上がりをみんなで楽しめるような雰囲気を作る。
7. 片付けをする。	T 1・T 2：安全に片付けができるよう声をかけていく。
8. 出来上がった作品を鑑賞する。	• 次回の活動に期待が持てるようにする。
9. 挨拶をする。	• 適宜、自由あそびへと移行するが、引き続きスタンピングをしたい場合は、T 1を中心にあそびを続ける。

8. 評価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

造形あそび指導案

9：15～10：00 於：そら組保育室

指導者 永坂圭子
荒井明子

1. 年齢：4歳児（そら組・もり組 選択制）
2. あそび設定の視点：創造性を引き出す二人指導
3. 主題：「ゆらゆら揺れるモビールづくり」～思い思いの魚を作ろう～
4. 主題について

造形あそびでは、様々な素材に触れながら、子どもたちがいろいろな発想を膨らましていける題材を考えて活動している。それぞれが自由な発想をする中で、創造性を育てていき、自分ならではの表現力を身に付けていく。また、作品を作り上げることで、満足感や充実感を味わっていくことができる。そのようなことをねらいに、楽しい造形あそびを目指している。

今回は、カラーポリ袋や、透明のプリンカップなどの涼しげな素材を使うことで、水の中の生き物をイメージし、それぞれの魚づくりをしていく。さらにモビールにすることで、動きのある作品づくりを楽しめていければと思う。

5. 園児の様子

進級し、クラス替えから2か月が経ち、子どもたちは新しい環境にも慣れてきているところである。自由あそびでは、折り紙、画用紙、空き箱などを使い、自由に工作やお絵描きなどを楽しんでいる。素材の使い方も少しずつ上手になり、工夫してみたり、友だちと一緒に作ることで、さらに発想を共有したり広げたりしている。そして、自分で作ったものを使い、さらに遊びを展開させる姿も見られるようになってきた。そこで、造形あそびでも、自分の思いが表現できるように素材や道具の使い方を教えたり、作ったり描いたりする楽しさをさらに味わえるようにしている。

6. 本時のねらい

いろいろな素材を使い、動きのある作品作りをすることで、創造性を育てていく。

7. 材料

- ・プリンカップ・カラーポリ袋・色画用紙・セロハンテープ・マーカー・モール他

8. 本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
1. 始まりの挨拶をする。	
2. 本時の内容の説明を聞く。	T（指導者）1：本時の活動内容に期待が持てるように説明する。

4歳児（そら・もり組）

3. プリンカップをもらいどんな魚にするか考える。	T 2：材料を配る。 T 1・T 2：どんな魚にするかアイデアが浮かぶように言葉をかけていく。
4. 必要な材料をもらい、魚を作っていく。	T 1：素材の扱い方を確認していく。 T 1・T 2：素材をもとに発想が広がるように言葉をかけていく。 T 2：机間巡視して素材や道具の扱い方に戸惑っている子どもを援助する。
5. マーカーで装飾する。	T 1：目や模様などマーカーで描くことにより工夫できるようにしていく。
6. モールをつけてぶら下げしてみる。	T 1・T 2：しっかりとつけられるようにアドバイスをする。
7. バランスがとれるようにする。	T 1・T 2：つける場所によりバランスが変わることに気づかせる。
8. 鑑賞する	T 1・T 2：次回の造形あそびに期待が持てるように言葉がけをする。
9. 終わりの挨拶をする。	

8. 評価

子どもたちが意欲的にテーマに取り組み、工夫して作ることができたかを指導者間で確認し、評価していく。

体育あそび指導案

9：15～10：00 於：幼稚園ホール

指導者 佐藤 憲夫
園山 恵理子

1. 年齢：4歳児（そら組・もり組 選択制）
2. あそび設定の視点：一人ひとりの能力を伸ばす二人指導
3. 主題：動物歩きにチャレンジしよう！
4. 主題について

幼児期の年中児に育てたい運動として基礎感覚がある。小さい時に経験しておくことで、その後の運動形成に大きな影響を与えていると言われている。色々な種目に挑戦する前にあそびを通して逆さ感覚、回転感覚、平衡感覚、腕支持感覚などを身につけておくことがとても重要である。

基本の運動の中には移動運動と操作運動があり、移動運動には走る、跳ぶ、回る、くぐる、ぶら下がる、よじ登るなどがある。操作運動には、押す、引く、投げる、捕る、蹴る、止める、打つ、つくなどがある。輪、棒、ボールなどの用具を使用して行うものもある。

今回、折り返し形式のコースを設定し、様々な動物に変身して、多様な動きを引き出しながら、運動量を上げていきたい。

本時においては4チームが同時にスタートし、全員がゴールしたら、次のメンバーが走り出すという形にしていく。動き終わった人は、一番後ろに並んで待つことで、静と動をうまくバランスを取りながら、調整力も高めていきたい。また操作運動として、特徴のある動物の動きを真似することで、自分の身体の手や足をコントロールしていくことで、無理なく部位を育てられるようにしていきたい。

最初の活動では「赤ちゃん歩き」から始まり、「クマさん歩き」や「カルガモの散歩歩き」を行った後、少しずつ難しい動きとして「片足クマさん歩き」、「あざらし歩き」、そして「フラミンゴ（片足ケンケン）」「ラッコ歩き」まで楽しみながら挑戦させていく。

色々な動きを使って、身体を使う部分を少しずつ変化しながら、基礎感覚で必要な腕支持感覚・跳躍力・バランス感覚を楽しく発展させ、高めていきたい。本時は、ホールの中に色々な動きを素早く丁寧に取り組んでいけるようにしていきたい。

5. 園児の様子

進級して約2ヵ月。新しい環境で日々のあそびを楽しんでいる子どもたちの姿が見られる。特に園庭で体を動かしたり、鬼ごっこなどゲーム性のある遊びをみんなで行うおもしろさが、わかってきた子どもたち。毎回の体育あそびでも指導者とのわくわくする様々なメニューを子どもたちは、とても楽しみに参加している。更に遊びの幅が広がるように声がけていきたい。

6. 本時のねらい

- 色々な動き（赤ちゃん歩きからフラミンゴ〈片足ケンケン〉までの7動作）をしながら、基礎感覚（腕支持感覚・跳躍力・バランス感覚）を養うようにする。
- やり方などのルールを理解しながら、楽しく行えるようにする。

7. 本時の指導過程

*最初に2つ（造形あそび・体育あそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

時間：9：00～9：10 場所：そら組

園児の活動	指導上の留意点
<p>1. 整列</p> <ul style="list-style-type: none"> • クラスごとに整列する。 <p>2. 準備体操</p> <ul style="list-style-type: none"> • 体をあたため、これからの活動が十分に行えるように準備体操をする。 <p>3. 挨拶</p> <p>4. 本時の内容と説明</p> <p>5. 4チームに分かれて色々な動きにチャレンジ開始。</p> <p>レベル1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 赤ちゃん歩き（膝付き四つ歩き） 2) クマさん歩き（お尻を上げて膝伸ばし） 3) カルガモの散歩歩き（しゃがんで手は後ろに組む） 4) 片足クマさん歩き 5) あざらし歩き（腕は伸ばし、足は引きずる。） 6) フラミンゴ（片足ケンケン） 7) ラッコ歩き（仰向きになって手で支えながら歩く） <p>レベル2</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) から7) までの中で、もう一度挑戦したいものを1つ選び、最後に行う。 <p>9. 整理体操</p> <p>10. 整列・挨拶・まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 教師の動きを見ながら、元気よく体操を行えるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>～指導者の動き～</p> <p>T（指導者）1：子どもたちの前で見本を示す。</p> <p>T 2：巡回しながら一人一人の様子を見る。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> • 整列させて元気よく挨拶ができるようにする。 • 本時の予定と注意事項を説明する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>～指導者の動き～</p> <p>T 1・T 2：うまくできない子どもには補助しながら励ましの言葉をかけていく。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> • 三角コーン多数 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>～指導者の動き～</p> <p>T 1：子どもたちの前で見本を示しながら、リードしていく。</p> <p>T 2：子どもたちを補助しつつ、一人ひとりの活動を認めながら、励ましの言葉をかけていく。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> • 本時のまとめと次回の活動について話し、期待を持たせるようにする。

8. 評価

- 基礎感覚を養う運動を行うことができたか。

※主に、一人ひとりの取り組み姿勢や反応などを複数の指導者で確認しながら評価していく。

リトミックあそび指導案

9：15～10：00 於：つき組保育室

指導者 高井正恵
磯沼美紀

1. 年齢：5歳児（つき組）
2. あそび設定の視点：休符を感覚的に捉える音の聴き分け活動
3. 主題：鬼太郎はどこだ？～休符を見つけよう～
4. 主題について

子どもたちが耳にしている音楽には、ビートを軸にいろいろなリズムが組み合わされている。もちろん、その中にはお休み（休符）も含まれている。“動”と“静”がうまく融合されているからこそ、心地良い音楽となっている。もし、“動”ばかりの、休符のない音楽が続いたらどうだろうか？常に音が鳴りっぱなしで、だんだん息苦しくなってしまうのではないだろうか。

本時は『ゲゲゲの鬼太郎』のうた（作詞 水木しげる／作曲 いずみたく）を題材に、イメージの世界から入って、休符の場所を発見したり、動きを表現していきながら、休符を感覚的に捉えられるように進めていきたい。

5. 園児の様子

年長になり、日々の取り組みにおいて、ますます意欲面が向上してきている。お当番を張り切ったり行ったり、友だちと話し合いながらあそびを進めていく様子も見られる。クラス目標【まずはやってみよう！】のように、一人ひとりがいろいろな活動を通して、積極的に行動し始めているところである。リトミックあそびでも、音に耳を澄ませ、伸び伸びとイメージ表現をしたり、音の聴き分けを楽しむ姿が見られるようになった。

6. 本時のねらい

音楽の中に休符があることや音のニュアンスを感じながら表現できるよう、感性を刺激しながら、感覚的反応を高めていきたい。

7. 本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
～準備：はだし・円になる～	○空間を広く使えるよう、環境を整える。 T（指導者）1：全体を通してピアノをベースに活動を進めていく。 T2：子どもたちと一緒に活動し、様子を見ながら適宜援助していく。

1. リトミックあそびのうた・あいさつ

2. 模唱（お返事ハイ）

『○○くん』→『はあい』

3. ウォーミングアップ

「♪」…歩く 「♪」…ゆっくり歩く

「♪」…かけ足 「♪」…スキップ

〈合図〉

☆高い音…頭の上で手をたたく

☆低い音…しゃがんで床をたたく

☆高低同時…片手を上にもう片手は床を
たたく

☆リズム「♪♪♪♪」。^{はい}

…アクセントで手をたたく

☆トリル…反対回り

☆呼びかけ“♪♪♪♪”

…友だちを見つけ握手する

4. 休符あそび

① なぞの手紙を読む。

『妖怪横丁へ来られたし。

鬼太郎がうたに隠れている。

ヒントは、ときどき現れる

目をつぶっている

友だちと力を合わせて、考えよ。

目玉おやじは何人鬼太郎がいるか、

知っている。』

妖怪横丁へ向けて出発 ～短調♪～

② いろいろな即時反応を行う。

• STOP→キョロキョロする。

• おまじない（長調）→近くの子と手を
つなぐ。

• 高音 gliss. ～砂が降ってくる→

• 低和音ドシンドシン→

○これからリトミックあそびを始める意識を持たせるようにする。

○出席確認及び本日の健康状態把握として子どもに呼びかけ、音に合わせて正確に答えられるよう配慮する。

T1：即時反応の合図を子どもたちにわかりやすいように伝える。

T1：子どもたちの動きを見て、合図のタイミングを工夫する。

T2：反応の速い子どもを認めていく。

T1：速さを変えていき、タイミングをつかませるようにする。

○友だちは何人でもよいという指示をする。

T2：お話をじっくり聞けるような雰囲気作りをする。

T1：子どもたちのイメージが広がっていかれるよう、話を進める。

○子どもたちの意見を取り入れていく。

T1：合図をわかりやすいように伝える。

子どもたちの動きを見て、タイミングを工夫する。

○何人かに動きの見本をしてもらう。

○子どもたちの表現を認めていく。

T2：反応の速い子どもを認めていく。

妖怪横丁に到着

- ③ うたを歌う。
（手たたき、ステップしながら）
- ④ お休みに気づく。
～どんな感じ？～
- ⑤ 友だちとお休みのところを表現する。
（楽器を使って）
- ⑥ お休みの動きを考えて、ステップする。

なぞを解く

- ⑦ 全部でお休みはいくつか考える。
（鬼太郎のマークを貼っていく。）

5. 終わりのあいさつ

T 1：ビートを明確に表して弾く。

T 1：休符に気づけるように弾く。

T 1・T 2：子どものつぶやきを大切にする。

T 2：困っている子がいたら、一緒に考えるなど援助していく。

T 1：子どもたちの発想を大切にする。

T 1・2：子どもたちと一緒に考える。

○友だちと答えを見つけ出せるようにする。

○本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。

8. 評価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し、本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。



知能あそび指導案

9：15～10：00 於：やま組保育室

指導者 大 嶋 比 查 子
北 村 満 利 恵

1. 年 齢：5歳児（やま組）
2. あそび設定の視点：達成感を味わいながら評価力を育む指導
3. 教材名：道つなぎパズル ～ピッタリあてはまるピースはどれかな？～
4. 本時刺激される知能因子：図形で体系を評価する（EFS）
5. 本時のねらい

途切れた道を太さや曲がり方、線の特徴などを考慮して空欄に当てはまるピースを選び、道をつなげていくことにより、図形で体系を評価する能力を育てる。

6. 教材について

知能あそびでは、子どもたちが示す興味関心の芽を育み、知的好奇心を刺激しながら、教えるのではなく自分で考える教材を作成して活動している。

その中でもパズル形式は人気の1つでもある。夢中で考え、パズルを完成させた時は、パッと笑顔が広がる。それから嬉しそうに「できた!」と言って、次々に挑戦していく。

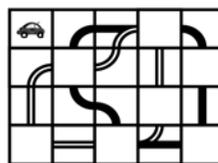
また子どもたちが遊びの中で、プラレールの電車を走らせるだけでなく、線路を繋げることを楽しんでいるところをよく目にする。日頃、電車の路線地図や旅行のパンフレットの地図を目にすることも多く、車のナビなどを見る機会もあり、地図に興味を持っている子も多い。

そこで今回は2つのパズルを用意した。1つ目は道、川、線路などが描かれたカラー盤のパズルである。道や川の色をヒントに繋げていくことになるので、はじめのパズルとしてやり方を知るという点で有効である。2つ目は白い線と黒い線が重なったサーキットコースのような線を繋ぐパズルを用意した。白い線と黒い線の重なる部分で、どの線が上になるか下になるかがポイントになり、直線と曲線のピースを、全体の道を見通して曲がる位置がどこになるかを判断していく。どちらも所々が空欄になっていて、途切れた道に正方形のピースを当てはめて完成させる形式である。

全て正方形のピースなので回転させながら向きを考えて、道を繋げていくことになる。どのピースを選び当てはめ完成させるか、判断力と評価力が問われる。



(パズル 1)



(パズル 2)

1つ目のパズルはグループで取り組むことになるので、お友達と協力して完成していく喜びも体験して欲しい。2つ目のパズルは個々で考えていくパズルになる。少しずつ道が複雑になり、ピースも増え難しくなっていくので、挑戦する気持ちが持続できるように、指導に心掛けていきたい。

そして完成させた時の達成感をたくさん味わってほしいと思う。この教材を通して、パズルへの興味だけでなく、地図にも興味を持って、自分で描いてみるなど、新しいことにも挑戦してほしいと願っている。

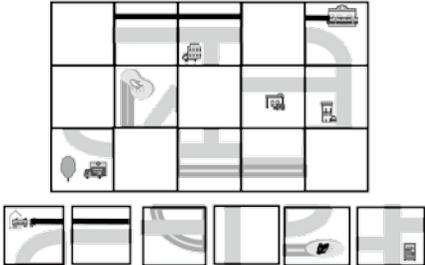
7. 園児の様子

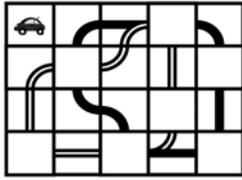
年長になって挑戦意欲も旺盛になり、子供たちは毎回活き活きと課題に取り組んでいる。好奇心が旺盛で、今日は「どんなことをするのか？」と楽しみにしている様子を感じられ、真剣な眼差しを向けてくる子もいる。

年長初めての知能あそびの「スリーヒントクイズ」では答えがわかった時、何かを発見したような、嬉しそうに笑顔で早く答を言いたい様子が伝わってきた。また数の大小を比べっこするカードゲームでは、お友達と一緒に考える楽しさからとても盛り上がり、「もっとやりたかった!」という声が上がった。そして持続して取り組む時間が長くなり、考えることの楽しさが伝わってくる瞬間がたくさんあった。

今回子どもたちが取り組むパズルは、これまでの反応から意欲的に取り組んでくれることに期待をしている。時にはなかなか完成できず、くじけそうになってしまうことも予想される。そんな時は励ましながら、挑戦する気持ちと気づきを大切に、じっくり考え完成させる達成感を味わってほしいと思う。個々の取り組みに対応しながら、子どもたちが充実した時間を過ごせるように進めていきたい。

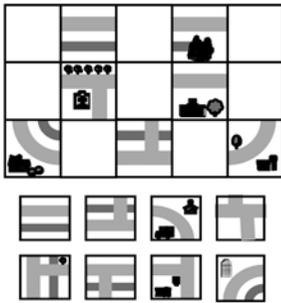
8. 本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
<p>1. 始まりのあいさつをする。</p> <p>2. 全員で集まってすわり、説明を聞いて、やり方を理解する。</p> <p>【説明用パズル】</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 出席確認して、本日の健康状態等を把握する。 <p>T（指導者）1：</p> <ul style="list-style-type: none"> 始めにグループで取り組む説明用のパズルを提示して、空欄にどのピースを入れたら、道がつながるかを判断させる。 気づきを大切にピースの向きなど、子どもたちと一緒に考え、意見を求めながら、理解させる。 <p>T 2：</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちがやり方を理解しているか、一人ひとりの反応と様子を見る。



3. 椅子を出して、それぞれの席につき、グループでパズルに取り組む。

【パズル A】



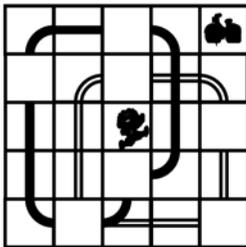
（他 5 題）

- 完成出来たら、確認してもらい、次に進めていく。

4. パズル A を終えたグループから、片付けて、個々にパズル B に取り組む。

【パズル B】

No. 1



（他 4 題）

- ピースを袋から出して、空欄に当てはまるピースを入れて完成する。出来たら確認してもらい、次に進めていく。
- No. 5 までの冊子が終わったら、片付けて、No. 6 のパズルを取りに行く。

- 次に個々で取り組むパズルを提示して、空欄にどのピースを入れたら、道がつながるかを判断させる。
- 進め方やピースの取り扱いについて、説明する。

T 2 :

- 4 人のグループになって、それぞれの席に着くように指示をする。

T 1 :

- それぞれの机に、パズルとピースを配る。

T 1・T 2 :

- 始めはピースを均等に配るなど、皆で協力して取り組めるように、留意する。
- 机間巡視して、道路、川、線路の曲がり方や、全体を見て、どのようにつながるか見通しを立てて、考えさせる。

T 1・T 2 :

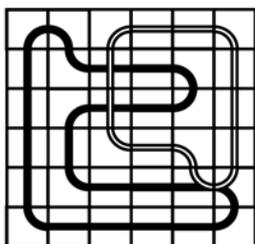
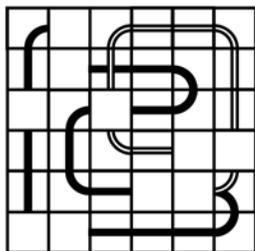
- パズル A を終えたグループから、個々にパズル B の No. 1 ~ 5 の冊子とピースを配り、作業がスムーズに行えるように指示する。

T 1・T 2 :

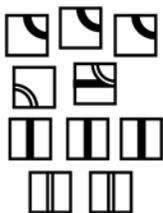
- ① 白い線と黒い線が重なっているところで、どちらの線が上になっているか。
- ② 全体の道を見通して曲がる位置がどこになるか。
- ③ カードの向きに留意して判断できているか。などに留意して、自分で気づけるように声をかけていく。

- No. 6 ~ 10 のパズルは、1 題ごと棚に並べてあるので、No. 5 の冊子が終わったら片付けさせて自分で取りに来るように指示をする。

No.6



完成見本



(他 4 題)

- 道が複雑になり、ピースの数も増えるので苦労している子には、適宜ヒントになる部分を示し助言を与えていくが、できるだけ、自分の力でやり遂げようとする姿勢を大切にしてい

5. 片付けとあいさつ

- ピースを袋に入れて、パズルを所定の位置に片付ける。
- 終わりのあいさつをする。

T1・T2:

- 片付けの手順を指示する。
- 片付けが速やかに行えるように対応する。
- 本時のまとめをし、終わりのあいさつをする。

9. 評価

活動後、本時を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みや反応、理解度など指導者間で確認し、本時のねらいが達成できたかをまとめて今後の実践に活かしていく。

小 学 校 の 部

知能訓練指導案

9:20～10:20 於：あずさ組教室

指導者 地 挽 裕 子
田 中 飛 鳥

1. クラス名：あずさ組 (1年生)

男子 19名 女子 14名 計 33名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 147.3

2. 授業設定の視点：パズルを通して推理力を育てる指導

3. 教材名：折り込み漢字パズル

4. 本時刺激される知能因子：図形で転換を集中思考する (NFT)

5. 本時のねらい

漢字パズルをどのような順序でどの向きに折っていくかを工夫して考えることにより、図形で転換を集中思考する力を育てる。

6. 教材について

本校で行われている、知能訓練の代表的な教材の一つにパズルがある。

パズルと一口に言っても色々な種類なものがあり、シルエットパズルや色札を織っていくもの、数字や文字を使用していくものなど、低学年のみならず繰り返し推理をして解き上げた時に爽快感のあるパズルは、高い年齢の学年にも人気のある教材である。知能訓練では30種類のパズル教材がある。本時に取り組む『折り込み漢字パズル』はその中にあっても、普通知られている形式とは異なっていてかなり特徴的でもあり、本校の知能訓練の代表的な教材の一つである。

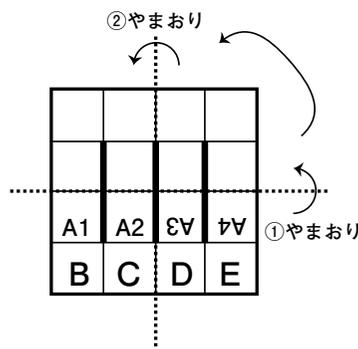
このパズルの特徴は、一文字の漢字を十文字に4分割した“漢字の4ピースパズル”のパズルピースを、表裏一枚にすべて散らしたシートひとつで教材が成り立っていることである。パズルのピースを集めるためには、マス目に沿ってパズルシートを折りたたんでいくのである。

例えば、左下の“園”という漢字を右下のパズルシートを使って完成させてみよう。



右下のパズルシートは太い線のところに切り込みが入っており、そのことも頭に入れて折る順序や向きを考えていかなければならない。最初にしなければならないのは作ろうとする漢字のピース

がどこにあるか探すことだ。“園”の漢字でいうと、2ピースはもう整った位置にあるので残りの2ピースを探す。するとその隣に逆さまになった、もう半分のピースがある。逆さまになっているピースの向きを正しい向きに変えるためには、切り込みを利用するとできそう。これに気づくためには転換力が必要になる。いろいろな線で折っていくうちに4つのピースは合わさったのだが、BCDEが仕切りのように邪魔になって、できた漢字が隠れてしまう。これを解決するために考えるのにも転換力を使う。



本時に取り組む『折り込み漢字パズル』は最初は色を手掛かりに考えていけるように、分かり易く漢字に色づけされているが、途中から単色になり漢字の形だけで見ていくことになる。また、パズルシートの形も難易度に合わせて少し変えてある。はじめは漢字の色も手掛かりになるのでスムーズに推理できるかもしれないが、段々と切り込みや穴の形が変わるなど、必要なピースが位置や向きもばらばらな場所についていてマス目の数も増えて、すんなりと転換力を活かして推理するのは困難なこともあるかも知れない。2人指導制を活かして児童たちの様子を観察し、思考が停滞している場合には助言を工夫して最後までやる気をもって取り組んでほしい。

児童たちに人気のあるパズルという形式を盛り込んだこのパズルには、皆が興味を持って取り組んでくれることを期待している。問題を正確に捉えてパズルを構成していくためには、ピースの向きや折り方を試行錯誤しながら考えていく柔軟性や推理力も必要になってくる。どの児童も個々のペースで時間一杯集中して取り組み持っている力を存分に発揮し、推理することの楽しさを十分に味わってほしいと考えている。

7. クラスの実態と指導の観点

今年度入学したあずさ組では、数回の知能訓練の授業を行ったのみではあるが、まだ良い意味での緊張感をもって授業に向かえているのか、落ち着いてじっくりと取り組める児童が多い。また、課題をこなしていくペースには進度差はあるものの、どの児童も考えることを楽しみながら取り組んでおり、課題に対する意欲も高い。このようなクラスの実態からも、個別に進めていく本時の『折り込み漢字パズル』では、更に試行錯誤して考えることの楽しさを実感させたい。そのためにも、一斉の説明で、全員に十分理解させた上で、それぞれがスムーズに個別の活動に入れるように留意する。

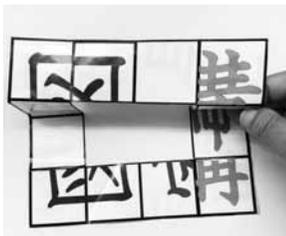
《知能構造（クラス平均）のプロフィール》

	IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
平均	147.3	153.0	145.8	142.3	142.3	159.3	143.2	143.5	148.4

本時に刺激する「集中思考」の知能因子指数（FQ）は、他のFQと較べると若干低い指数を示している。得意な図形の領域のパズル形式を用いる中で、楽しんで取り組み、推理する力を伸ばしていきたいと考えている。

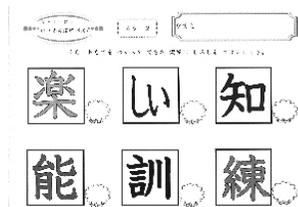
8. 本時の指導過程

教材の内容及び学習活動	指導上の留意点
<p>1. 本時のパズルの内容と進め方を理解する。</p> <p>◎『折り込み漢字パズル』（個別）の進め方</p> <p>① 1つの漢字を十字に切って四等分にしたのが1ピースになっている。</p> <p>② ピースは、線に沿って集める。線のないところは折らない。</p> <p>③ できた字がパズルシートの影に隠れないようにする。</p> <p>④ 周りのパズルシートは、見えても構わない。</p> <p>⑤ 1文字ずつパズルを完成し、確認に印をもらう。</p> <p>◎パズルシートの難易度</p> <p>カラー1：表裏（4×4）2×2穴あき</p> <p>カラー2：表裏（4×4）2×1穴あき</p> <p>ピンク：表裏（4×4）2×2穴あき</p> <p>黄色：表裏（4×4）切り込み入り</p> <p>黄緑色：表裏（5×5）切り込み入り</p> <p>2. カラーパズル1のパズルシートを受け取りパズルに取り組む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 板書や大きな提示を使って、分かり易く説明をする。 <p>T（指導者）1：一斉に指導を進め、児童の興味関心を引きながら説明がいきわたるようにする。実物と例題を提示し、具体的に進め方のポイントを説明する。</p> <p>T 2：机間巡視をしながら、子どもが理解できているか確認する。必要に応じて個別に対応する。</p> <p>2. カラーパズル1のパズルシート、見本つき進度表を配布し、パズルに取り組ませる。</p> <p>T 1：カラーパズル1のパズルシートを配布する。</p> <p>T 2：見本つき進度表を配布する。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 適切なパズルピースが探せているか確認する。 • 表裏に書かれた1枚のパズルシートの中からピースを完成させることを注意させる。



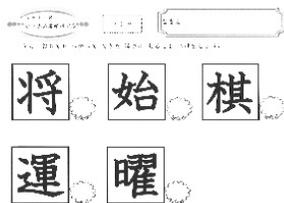
取り組みの様子

3. カラーパズル1のパズルがすべて終了したら、カラー2のパズルシートをもらい、パズルに取り組む。



進捗表カラー2

4. カラー2のパズルが終了したらピンクのパズルのシートをもらいパズルに取り組む。



進捗表ピンク

5. ピンクのパズルが終了したら黄色のパズルのシートをもらい、パズルに取り組む。



進捗表黄色

進捗表黄緑色

6. 使用した用具を片付ける。

7. 終わりの挨拶をする。

3. カラーパズル2のパズルシート、見本つき進捗表を配布しパズルに取り組ませる。

- 転換力を活かして折る方向や順番を考えているか様子を見る。

T1・T2: 児童の取り組みの様子を見て必要に応じて確認または助言をする。

※個々の様子を見て、滞っている場合には段階に応じた助言をする。

- T1・T2: できるだけ自分の力で完成できるように助言を工夫する。

4. ピンクのパズルシート、見本つき進捗表を配布しパズルに取り組ませる。

T1・T2: 3と同じ。

5. 黄色のパズルシート、見本つき進捗表を配布しパズルに取り組ませる。

T1・T2: 3と同じ。

- 躓いている子どもには、できるだけ自分で完成できるように助言する。

- 黄色のパズルをすべて終了した子どもには、黄緑色のパズルシートと見本つき進捗表を配布する。

6. 片付けをする。

- 終わりの合図をし、用具の回収をする。

7. 終わりの挨拶をしっかりするように促す。

9. 評価

授業後、本時を振り返り、児童一人ひとりの課題への取り組み反応（意欲・集中力・難易度）について指導者同士で確認をし、本時のねらいが達成できたかどうかを実践記録にまとめて、今後の実践に活かす。

国語科学習指導案

9：20～10：20 於：やくも組教室

指導者 内 藤 茂

1. クラス名：やくも組（1年生）

男子19名 女子13名 計32名 聖徳式（個人）平均 IQ 147.5

2. 授業設定の視点：子どもが眼に浮かべる場面映像を拾う

3. 主 題：『けんちゃん、サッカーしないかあ』より

4. 主題（教材）設定の理由

・教材観

【カリキュラム上の柱】

- ① 思考…論理的思考を中心とした、読み取り考える力を教材を通して知能を刺激する。
- ② 感情…まだ意識化されていない「感情」に文章を通して触れさせ成長をうながす。
- ③ 構え…成長の中で対象の定め方（～として見る）を見抜き、対象と視点の関係を把握させること。
- ④ 用具言語…読んで、書いて、話して、聞いてということを目的とする。

言葉を聞く、読む、という行為には、その言葉に思考、感情、場面が伴います。今回の授業は「言葉には場面が伴い、その場면을共有する」ことに焦点をあてたいと思います。

どんな文学作品でも、読んだ人間の場面の共有がなければ作品として成り立ちません。俳句は17音という限られた句が時空を超えて共有する場面があるからこそ芸術であると言えます。ところが子どもたちは大人と違い、様々なイメージ世界を持ち、様々な場면을思い描きます。その場面の共有と意識化が第一の授業のねらいです。

場面というのは、空間的な位置関係や事実の経過だけではなく、その人がどのような思いでその言葉を言ったのか？という洞察にもつながってきます。この点は、子どもによって想像するものが異なり、どれが正解というものではありません。ここに子どもたちの個性を見ることができます。

・児童観（クラスの実態）

小学校入学後各教科の報告や、授業開始時の挨拶、素読への取り組みを見てもらえれば1年生として順調に成長していることがわかるでしょう。しかし注目していただきたいのは、入学以前からの言葉の焼き付けです。例えば、「洋服」「寿司」という字が読めなくても、「洋服の○○」「○○寿司」の看板の写真を見せると一発で即答します。つまり、漢字を習う前に子どもたちの脳には図形や記号として焼き付いているものがたくさんあるのです。

子どもは目や耳から入る言葉を興味にしたがって意味がわからなくてもため込んでいきます。言葉を教え込むのではなく、すでに貯めこんだ言葉呼び起こし広げていくのが本校の知能教育とし

での国語です。

また、「言葉には思いが乗る」ことを低学年のころから意識化させることも大切です。

本クラスは「お話づくり」が好きな子が多くいますが、展開だけを重ねるのではなく、場面と思いの伴う意識化ができたかと期待しています。

《1年やくも組 知能プロフィール》

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
147.5	152.8	145.3	144.4	143.1	159.3	142.1	145.6	147.4

5. 指導計画

1. 「わたしはグーで、みんなはチョキよ。わたしの勝ち。」から場面の共有化
2. 「けんちゃん、サッカーしないかあ。」からの場面の共有化
3. 2における人間関係を考え、様々な場面を読み取る (本時)

6. 本時の目標

会話文から場面を想像し共有化する。

7. 本時の指導展開

ね ら い	学 習 過 程	指導の重点および留意点
場面の共有化	<ul style="list-style-type: none"> ○学習開始の挨拶 ○素読 (論語ほか) 	音読により脳を活性化させる。(ウォーミングアップ)
場面には人の思いがあることに気づく	<ul style="list-style-type: none"> ○「けんちゃん、サッカーしないかあ。」の文から想像できる場面を発表する。 	一つの場面に集約させるのが目的ではなく、発表する場面がどのような経験からきているのか聞き取る。
文から場面と人間関係を読み取る	<ul style="list-style-type: none"> ○「こんどは、ほくだよ！」 「えーっ、そんなのずるいよ。」 という会話から、場面の状況を読み取る。	主体の確認から、場面の想像、自分の経験と重ね合わせる。

10. 評価

会話文から場面の共有ができたか。

数学科学習指導案

9:20～10:20 於：つばさ組教室

指導者 三輪 広明
西谷 彩

1. クラス名：つばさ組 (2年生)

男子 23名 女子 10名 計 33名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 144.6

2. 授業設定の視点：創造的知能の開発と育成を目指した学習指導

3. 授業の題目：かぶっている帽子の色についての考察

4. 題目について

数学の学習において、論理的に物事を考察していくことは大切なことである。数学という学問が、1つの決まりからスタートし、そのことからどのような事実に行きつくのか探究していく面があるからである。低学年の間では、論理的に考察していく面と、感覚的に推論していく面とが顕著に混在している。時にその推論が考えを引き上げていくきっかけとなることもある。集団で議論していくことの面白さでもありと感ずるところである。論理的な考察を得意とする子にとって、感覚の裏側にある論理を探っていくことは、論理を追究していく興味深い題材ともなるからである。

本校では、数学における論理についての教材を随時取り上げ、思考力の育成を図っている。規則性を見出していくという面では高学年において多くの教材に取り組んでいる。顕著なものとしては、「数列」「集合」と言う単元での学習があげられる。4年次の「集合」においては、共通点や相違点をもとに包摂関係を考察していく。5年次の「数列」においては、規則に目を向け、 n 項目を求めたり、 n 項までの和を求めたりする方法を探っていく。等差数列から、等比数列へと公比や公差を変えていきながら、一般式を求めていく。

本題目においては、自分のかぶっている帽子の色を考察していく。赤と白の帽子があり、相手のかぶっている帽子の色がわかることで、自分のかぶっている帽子が何色であるのか考察していく。単に相手の帽子の色を見ることからの推論から、更に相手の答えも手掛かりとして考察していく課題にも挑戦していく。ここでは、自分のかぶっている帽子の色を仮定することが論理を進めていく助けとなるものと思われる。

5. クラスの実態

本クラスは、一斉で議論していくと積極的に意見を言う人がいる一方で、なかなか自分の考えを発言しない人もいる。考えていくこと自体には関心があり、意欲的に個別の課題に取り組める点も特徴的な一面である。一斉での取り組みと個別の取り組みのバランスを図ることでこのクラスの特徴を踏まえ思考を進めていくこともできるのではないかと考えられる。今回、思考の限界へ挑戦させようと考えている。段階的に問題場面を設定し、クラスの全員を追い詰めていくことができればと考えている。

なお、本クラスの平均IQとFQは以下のとおりである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
144.6	145.2	140.4	148.0	136.7	149.7	143.0	148.8	144.8

6. 指導計画

- (1) 帽子の色の考察 1校時 (本時)
 (2) 応用課題への挑戦 1校時

7. 本時のねらい

自分のかぶっている帽子の色を、相手の帽子の色や返事から推理し、集中思考力を養っていく。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
1. 課題の把握	問題1に一斉に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> ○相手の帽子の色によって、答えがわかる場合とそうでない場合があることを一斉で確認する。 ○課題の理解が図れた段階で、個別の課題に取り組ませる。 ○帽子の数や人の数を変え、課題の難易度を加減する。 ○感覚的な説明か、論理的な説明か吟味しながら、論理を組み立てていく。
問題1 帽子が3つあります。そのうち1個は赤い帽子です。あなたの帽子の色は何色でしょうか。		
2. 一斉で考えさせる。	個別の課題で取り組んだものの中から、選んだ問題の答えを一斉で発表する。論理的に説明する。	
3. クラスとしての到達点の確認		

知能訓練指導案

9：20～10：20 於：みずほ組教室

指導者 浅利 絵海
中村 沙織

1. クラス名：みずほ組（2年生）

男子 23 名 女子 11 名 計 34 名 聖徳式（個人）平均 IQ 143.7

2. 授業設定の視点：言葉づくりを通して、拡散思考力を育てる指導

3. 教材：文字転換言葉作り～文字を組み合わせたくさん思いつく～

4. 本時刺激される知能因子：記号で転換を拡散思考する（DST）

5. 本時のねらい

文字を組み合わせる言葉の数多く思いつくことにより、記号で転換を拡散思考する力を育てる。

6. 教材について

日本語には五十音があり、1文字でも意味を持つ単語となるものから、ひらがなの組み合わせによって意味を持つ単語を構成しているものがある。ひらがな1文字が1つの音に対応しており、大人から子どもに親しまれている身近な言葉遊びである「しりとり」は、言葉の終わりの音をポイントにした言葉を思いつく遊びである。知能訓練の教材では『言葉』を「記号」と「概念」の領域で扱っている。「しりとり」のように意味の上での関係性がなく、『言葉』を「文字」や「音」として捉える場合は、「記号」の領域での刺激となる。

本教材の「記号で転換を拡散思考する」知能因子は、記号で変化することを柔軟に思いつく能力である。この知能因子の課題としては、1つの言葉のうちのいくつかの文字を組み合わせ、できるだけ多くの言葉を考えていくものがある。

例題：「いるか」

この言葉のうちのいくつかの文字を組み合わせ、できるだけ多くの言葉を考えましょう。

解答例：

「いか」「かい」「かるい（形容詞）」「いる（動詞）」「かる（動詞）」

もとにあった言葉の意味にこだわらず思考を転換していくので、角度を変えてみる、発想を変えてみる柔軟な思考力（柔軟性）が要求される。また、拡散思考力を育てるためには、一つだけでなくなるべくたくさんの言葉を思いつくこと（流暢性）、さらに他の人が思いつかないような発想（創造性）も重要となる。本時の活動では、柔軟性や流暢性、また創造的知能の育成に欠かせない創造性が児童の思考の柱となる。

そこで、本時では個別の活動を充実させると同時に、クラスの友達の発想を認め合いながら、

自分とは違ういろいろな考え方を知り、お互いに刺激し合えるように発表形式を取り入れていく。たくさん思いつくことだけでなく、友達が思いつかない自分しか思いつかない発想も楽しめるように、授業の進め方や発表の方法を工夫する。

7. クラスの実態と指導の観点

本クラスのIQとFQ(知能因子指数)の平均は以下の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
143.7	150.8	139.1	141.1	134.7	148.5	140.3	150.9	144.1

みずほ組は昨年度からの持ち上がりのクラスである。クラス全体の様子としては、元気で好奇心旺盛な児童が多く、知能訓練の授業では考えることを楽しみながら、「早くやりたい!」「もっとやりたい!」という意欲的な姿勢がみられる。また、一斉指導の場での発言には活発で勢いがある。

本時に刺激をする因子は「記号」の領域と「拡散思考」の働きである。「記号」「拡散思考」の平均値はIQに比べるとやや低い数値を示している。本時の課題は「記号」として言葉を扱うが、語彙の豊富さが柔軟な発想に繋がるため、概念の力も活かして思考を働かせていくことが予想できる。また、友達が思いつかないような発想を思いつくためには評価力も活かされるだろう。

本時の課題では、一斉で時間を区切って進める形をとるため、説明時に題意を把握できるように聴く姿勢を整えていく。また、児童の発表に関しては、単調にならないようにゲーム性も取り入れる工夫をしていく。進めていくなかで、なかなか思いつかずに苦労する児童、発表することが苦手な児童がいることも予想されるが、二人指導制のメリットである個々の実態に応じた対応が可能な点を活かし、児童一人ひとりが自分の力で考える面白さを実感するとともに、友達の発表からも刺激を受けて柔軟な思考力を育てていけるような授業にしていきたい。

8. 本時の指導過程

教材の内容及び学習活動	指導上の留意点
<p>1. 挨拶をして、授業に向かう姿勢を整える。</p> <p>2. 課題1に取り組む。 『言葉の中のいくつかの文字を使って、いろいろな言葉を作る。』 (課題1)</p> <p style="text-align: center;"> ち よ う し ん き </p> <p>(考えていくときのルール)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> • 固有名詞は不可で、地名、歴史上の人物はよい。 • 動詞や形容詞でもよい。 • 小文字は大文字にしてもよい(拗音)。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> • 挨拶をし、授業に臨む姿勢を整える。 • 出席を確認し、本日の健康状態を把握する。 <p>T(指導者)1: 白板に課題1の問題カードを提示しながら説明し活動内容を理解させる。一斉形式で思いつきを発表させる。全体の様子をつかみ、発表を聴く姿勢を整えさせる。</p> <p>T2: 考えていくときのルールのポイントを提示し、児童の思いついた言葉を板書する。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 2文字以上の言葉で考えさせる。 • カタカナ表記の言葉は可とする。 <p>例…「うし」「きんよう」「きんしちょう」など</p>

3. 課題2に取り組む。

〈課題2〉

ひ や く に ん い っ し ゅ

1. 次の言葉の中のいくつかの文字を使って、いろいろな言葉を作りましょう。
※小文字は大文字にかえてもよい。

ひやくにんいっしゅ

★思いついた数 個

☆発表する言葉

- ① プリントに思いついた言葉を記入する。
- ② 思いついた言葉を1つずつ発表する。
- ③ 自分の記入したプリントに、友達が発表した言葉があった時は、その言葉にシールを貼る。全ての言葉にシールが付いたらゲーム終了。

※いろいろな観点(品詞、文字数)で考えることが、たくさん思いつくことに繋がることに気づく。

※たくさんの友達が思いつく言葉と自分にしかなら思いつかない言葉があることを知る。

4. 課題3に取り組む。

〈課題3〉

お ち か い さ ん か じ よ う

や き は ま ぐ り

〈考えていくときのルール〉 ※追加分

- ・濁点、半濁点を使用してもよい。
- ・伸ばす棒(長音)を使用してもよい。

T 1: 白板に課題2の問題カードを提示する。

T 1・T 2: プリントを配布し、記名を確認する。
プリントに思いついた言葉を記入させる。

- ・机間巡視をしながら、考えていくときのルールを踏まえて進めているかを確認する。

T 1: 時間を区切り、思いつきを発表させる。

T 2: 机間巡視をしながら、シールの貼り方等理解できているかを確認し、必要に応じて対応する。

T 1: 白板に課題3の問題カードを提示する。
次は2つの言葉の中のいくつかの文字を使って、できるだけ文字数の多い言葉を考えるように伝える。追加するルールについて伝える。

T 2: 追加分のルールを提示する。

- ・3文字以上の言葉で考えさせる。
- ・できるだけ文字数の多い言葉を考えさせる。
- ・文は不可であることを伝える。
- ・長音については、児童から質問が出た段階で、追加する。

みずほ組 (2年生)

<p>① できるだけ文字数の多い言葉を考える。 ※余白に思いついた言葉を書き留めておく。</p> <p>② 思いついたものの中から、一番文字数の多い言葉を1つ選んでカードに書く。</p> <p>③ カードに書いた言葉を発表する。</p> <p>4. 使用した用具を片付け、今日の授業の感想をまとめる。</p> <p>5. 終わりの挨拶をする。</p>	<p>T 2: プリントを配付し、記名を確認する。</p> <p>T 1・T 2: 机間巡視をしながら、余白をうまく利用できているか、文字数に着目して考えることができているかを確認する。</p> <p>T 1: 文字数ごとに思いつきを発表させる。</p> <ul style="list-style-type: none">• 同じ言葉を思いついた児童は、自分のカードを出す。• 一番文字数の多い言葉から、友達の思いつきの良い点や工夫したところに気づく。 <p>T 1: 終わりの合図をし、プリント類を回収する。</p> <ul style="list-style-type: none">• 児童に感想を聞き、本時の課題がねらいを達成できたかどうかの判断材料とする。• 終わりの挨拶をしっかりとできるように促す。
---	---

9. 評価

授業後、児童一人ひとりの課題への取り組みや反応（意欲・集中力・理解度）について指導者二人で分析し、本時のねらいが達成できたかどうかを実践記録にまとめ、今後の実践に活かす。

リーダー・イン・ミー学習指導案

9：20～10：20 於：あさぎり組教室

指導者 長谷川 和 暉

1. クラス名：あさぎり組（3年生）
男子21名 女子11名 計32名 聖徳式（個人）平均IQ：145.3
2. 授業設定の視点：一人ひとりが個性を発揮し、お互いの力で学び合う授業
3. 授業の題目：第6の習慣「シナジーを創り出す」
4. 題目について

本校に道德教育の柱の一つとして「リーダーインミー」が導入されて、4年目となる。フランクリン・コヴィーの「7つの習慣」の価値を子どもたちと共有し、本校独自の道德教育を確立するべく授業を行っている。ゆくゆくはその子どもたちが、社会において貢献・活躍することを目指している。

今回の授業で取り上げるのは、第6の習慣「シナジーを創り出す」という単元である。まずは「シナジーを創り出す」とはどのようなことか、以下に引用する。

シナジーとは何でしょうか？ 簡単に言うなら、二人以上の方が協力して働けば、一人でやったときよりもよい結果が出るということです。自分のやり方ではなく、より優れたやり方、高度なやり方なのです。

（ショーン・コヴィー著・フランクリン・コヴィー・ジャパン訳「7つの習慣ティーンズ」）

つまり「シナジーを創り出す」とは、一人の力よりも二人三人とチームになって力を合わせることで、さらに大きな力（結果）を生むことができるということである。授業で言い換えるならば自分の考えに加えて友だちの発言を聴くことで、集団として学習の質が向上することだと考える。つまり「学び合い」である。自ら考え、さらに友だちの発言を聴き合いながら「シナジーを創り出す」という価値を実感できるように促していく。

また「7つの習慣」の価値を子どもたちと共有する上で大切にしたいことがある。それは、以下のような「道德の方向性」である。



「リーダーインミー」の価値を習慣化する、目標設定する前段として、今できていることを子どもたちに語らせ、それを実感する中で自信をもって前進できるように学習活動を考えている。このように「学び合い」と「方向性」を踏まえて、今回は、絵本「おおきくなるっていいことは」を教

材として使用する。これまでの学校生活を見つめ直し(振り返って)、自らの成長に目を向ける。その中で、詩「おおきくなる(成長する)っていうことは……」に当てはまることを考えさせる。この学習活動において、自分自身では思いもよらない仲間(他者)の発想に出会うことだろう。仲間と学び合うことで、 $1 + 1 = 2$ 以上、つまりは協力することでさらなる結果を生むということ子どもたちが実感できるように、授業をデザインする。

5. クラスの実態

この4月に初めて担任として本学級の子どもたちに出会った。これまで教科を担当したこともなかったのだが、アットホームな雰囲気、子ども同士また子どもと教師がすんなりと馴染んでいく感覚があった。それはこの子たちが醸し出す“とびきりの明るさ”によるものであると考えている。教室にはいつも笑顔があふれている。

このような子どもたちだからこそ、今年度大きく力を入れているのが「発言の聴き方」である。“だれが”話したことなのか。その発言の“何が”よいのか。国語とリーダーインミーの学習が中心であるが、ここにきて自分の考えと、仲間の発言のちがいを認識し始め、またそれぞれによさがあることを実感し始めている様子が見られている。

題目である「シナジーを創り出す」は第6の習慣であり、まずは第4の習慣「Win-Winを考える」や、第5の習慣「まず相手を理解してから、次に理解される」が身につくにつれて、生まれていく価値である。これまで2年間「リーダーインミー」にふれてきた子どもたちでもあるが、学級としても、友だちのよさを探す・よい友だちを皆で受け止め、認めることに取り組んでいる。帰りの会における「みとめ合い」活動や、学級通信・教室掲示において、教室でみんなで学び合う意味を少しずつ感じ始めている。これらを踏まえて、今回の単元をそれらの習慣の前に当てる。

本クラスのIQ(知能指数)とFQ(知能因子指数)は下記の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
145.3	150.7	140.0	145.0	140.6	144.7	148.4	156.3	136.6

6. 指導計画

- ・「自分ってどんな人?①」 自分のいいところ見つけ隊
- ・「自分ってどんな人?②」 ポスター「自分の木」をつくろう
- ・「習慣の力」自分が普段心がけている「習慣」について考える
- ・「一時停止ボタン」第1の習慣……………前時
- ・「シナジーを創り出す(3年生:助け合う)」第6の習慣……………本時

7. 本時のねらい

詩「おおきくなるっていうことは」に当たるものを考え、また仲間の発想に出会うことを通して、「助け合えばさらなる力が生まれる($1 + 1 = 2$ 以上)」という“第6の習慣”の価値を実感する。さらに、自分とクラスの仲間が皆「成長している」ことを確かめる。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
<p>構えを整える。</p> <p>自分にとっての「成長」に向き合い、表現する。</p> <p>「成長」というものを自分たちの言葉で整理し直す。</p> <p>絵本にある「成長」についても考える。</p> <p>自分にとっての「成長したこと」を考える中で「成長できた」「成長している」ことを実感する。</p> <p>まとめ</p>	<p>◇挨拶</p> <p>◇詩「おおきくなるっていうことは……」の続きを考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・服が小さくなるっていうこと ・ちょっと難しいことを言えるっていうこと ・友だちを守れるっていうこと <p>◇自分たちが考えたものについて分類したり、背景を考えたりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この「成長」はどれと似ているだろう。 ・これは何のことを言っているのだろう。 ・「成長」とはどういうことだろう。 <p>◇絵本の読み聞かせを聴く。</p> <p>◇「おおきくなったと思うことは……」について考え、話し合いを行う。</p> <p>◇授業で出てきた「成長」についてまとめる。</p>	<p>ワークシートに考えたものを書きこみ、整理させる。</p> <p>子どもたちが考えたものをこちらで分類したりせず、まずはどんどん出させていく。</p> <p>挙がった「成長」について、子どもたちの言葉で語らせたり、その「成長」にまつわるエピソードを話させたりする中で「成長」についての考えをまとめていく。</p> <p>詩的な表現も含めて、再度「おおきくなるっていうことは」について考えさせる。</p> <p>4月からの「成長」 小学校2年間での「成長」 小さい頃からの「成長」 さまざまな視点で考えることを通して、自分自身が成長している存在であることを実感させる。また、友だちから出される「成長」についても向き合う時間をとる。</p> <p>〈振り返り〉を書かせ、授業で考えたことを文章化させる。</p>

理科指導案

9:20～10:20 於：情報室

指導者 歌田翔真

1. クラス名：しらさぎ組 (3年生)

男子21名 女子11名 計32名 聖徳式(個人)平均IQ 143.1

2. 授業設定の視点：想像を創造へと導く理科教育

3. 授業の題目：虫メガネ

4. 題目について

本校の理科教育では、理論や知識ではなく、実験や日常生活の体験を通して自ら疑問を持ち、自分なりの考えを導き出すことを重点にしている。そして、実物の様子を細かく観察しながら事象の本質に迫っていけるように、また、学年が進むにつれてより抽象的な内容を含んだものになるように、単元や授業を設定している。本時の授業は、本校第5学年の「光の進み方」で扱う凸レンズの仕組みや反射・屈折に繋がっていく内容である。部分的にレンズが隠された虫メガネに太陽光を当てた場合、どのように光が集まるかを考え、光とレンズの関係に迫っていく。目に見えない光の動きを想像させることで、英才児が持っている創造力を刺激し、「光はどのように集まるか」から「どのようにしたら光は集まるか」へ思考を発展させていきたい。

5. クラスの実態

本クラスの児童はどの課題にも興味を持って取り組み、特に実験や観察で対象と向き合うときには高い集中力が見られる。取り組み姿勢や表現方法には個性がみられ、黙々と取り組む児童もいれば、活発に発言しようとする児童もいる。文章表現が得意な児童もいれば、口語表現が得意な児童もいる。それぞれの得意分野を活かしながら、主体的に授業に取り組めるように留意していきたい。なお、本クラスのIQ(知能指数)とFQ(知能因子指数)は下記の通りである。集中思考の平均値が高い値を示しているため、光の集まり方を話し合う場面では、論理的に話し合いが進められることが期待される。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
143.1	145.8	141.3	142.2	140.5	145.6	146.3	150.8	132.4

6. 指導計画 (全8時間)

虫メガネを使って、物を拡大して見る。……………2時間

(レンズとは。レンズでどのようなことができるか)

虫メガネを使って、いろいろな色の画用紙を焦がす。……………2時間

(どうして紙が焦げるのか)

虫メガネを通った光の明るさや暖かさの違いを調べる。…………… 2時間

(重なった光がもたらすもの、レンズを通った光の集まり方)

レンズの一部を隠した場合での光の集まり方を考える。…………… 2時間 (本時は2時間目)

(レンズを通った光の集まり方の応用)

光学装置を使用してレンズを通った光の集まり方を観察する。…………… 1時間

(レンズを通った光の集まり方のまとめ)

7. 本時のねらい

虫メガネを通る太陽光の集まり方を考えさせる。

紙を焦がすはやさは光の量によるものであることを理解させる。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
<p>1. 課題の把握</p> <p>課題1 どうして焦げ方が遅くなったのでしょうか。</p>	<p>○何もしていない虫メガネと細工がしてある虫メガネでの紙が焦げる動画を見て、焦げ方が遅くなった虫メガネにどのような細工をしたのかを考える。</p>	<p>○虫メガネ以外の要因も挙げてもらい、場合によっては授業の後半で触れる。</p>
<p>2. 結果の発表</p> <p>課題2 シールをレンズの端に貼ったら、焦げ方はどのようにかわるのでしょうか。</p>	<p>○レンズの一部(中心)をシールで隠した虫メガネを使用していたことを伝える。</p> <p>○中心を隠したものと比べて焦げ方がはやくなるのか、遅くなるのかを考える。</p> <p>○シールを半分に分けて貼りつけた場合も考える。</p> <p>○焦げるはやさが遅くなる理由を考える。</p>	<p>○今までの実験を想起させながら、光の集まり方を考えさせる。</p> <p>○光の集まり方は紙の焦げ方にどのような影響を及ぼしているかを、光の量に着目させながら、考えさせる。</p>
<p>3. 学習のまとめ</p> <p>課題3 紙をはやく焦がすための方法は。</p>	<p>○できるだけはやく紙を焦がすためにできる工夫を考える。</p>	<p>○光をたくさん集める方法を考えさせる。</p>

地理科学習指導案

9:20～10:20 於:あさま組教室

指導者 細 沼 克 吉

1. クラス名:あさま組 (4年生)

男子13名 女子16名 計29名 聖徳式(個人)平均IQ 156.3

2. 授業の題目:地形図から島の様子をイメージする

3. 主題について

本校では社会科という教科ではなく、2年生から地理の学習を行っている。この2年生で行う地理の学習は、各学期末に3～4時間掛けて行うもので、3年生から本格的に始まる地理学習の前段階をなすものである。ここでは1学期に「視点の転換」、2学期に「鳥瞰図の視点」、3学期に「空間の連続性」と空間をさまざまに捉えていく力を養ってきている。

3年生からは2時間ずつ地理の授業が設定されており、ここでは2年生のときの学習を土台として、等高線を用いて3次元の空間を平面上に表していく方法と、逆に平面上で表された等高線から、実際の3次元的な空間をイメージしていくことに取り組んできた。しかし3年生の段階で扱う等高線は、単純化された山の形など、基礎的なものに絞って学習している。

4年生での地理学習では、地球儀の基本的な見方や平面上の地図との違いなどについて学習し、その後二万五千分の一の地形図を使って本格的な地図の見方の学習に入る。しかし最初に扱う地形図は吉祥寺周辺の地図で、等高線が複雑に入り組んでいる地図を扱うわけではない。今回の授業では、二万五千分の一の島の地形図を用い島の3次元的な形をとらえさせるとともに、地形図に記載されているその他の情報を読み取り、それをもとに島の人々の生活を含めた島のイメージを子どもたち一人ひとりが想像力を発揮して作り上げていければと考えている。

4. クラスの実態

4・5月地球儀の学習を中心に学習を進めてきた。その中で南極が大陸であることを確認すると、南極はどこにも属さないことや、様々な国の観測基地があることなどが子どもたちから出された。このクラスの子どもたちは、地理に関心の強い児童が多く、その分知識も豊富である。3年生の時、クラス活動でワードゲームに取り組んだ時も(言葉のしりとり遊び)わざわざ地図帳で地名を調べ、地名をつなげていたり、帰りの会などにも地名のクイズを出題する子どもたちがいるなど、地理の授業以外でも地理的な学習に楽しんで取り組んでいく雰囲気がある。またこのクラスは女子が多いクラスで、その点本校の他のクラスとは異なっている。学習には落ち着いて取り組んでいく雰囲気があるが、授業中の発言などは特定の児童になってしまうこともあり、できるだけ多くの児童の声を引き出す工夫が必要である。今回の授業では子どもたちの活発な発言を引き出していく中で、一人ひとりの島のイメージを膨らませていければと考えている。

下記にクラスのIQ（知能指数）とFQ（知能因子指数）の平均を示した表を載せておいた。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
156.3	162.6	152.3	154.3	158.9	155.4	148.6	169.9	148.9

5. 指導計画

3年次に学んだ等高線の復習 1校時

島の地形図から島の様子をイメージする 本時

6. 目標

地形図を読み取り、島の様子を想像していくことができる。

7. 本時の指導過程

ね ら い	学 習 活 動	指導の重点および留意点
(1) 二万五千分の1の地形図から、島の3次元的なイメージをつかませる。	① 基本的な地図記号を復習する。 ② 等高線から、島の高さや傾斜などのイメージをつかみ、断面図で表してみる。	等高線の特徴を読み取らせていく。
(2) その他の地形図の情報から島の様子を考えさせ、まとめていく。	① 島の様子をつかむための情報を地形図から読み取り、そこから想像できることを発表していく。 ② 各自自分なりの島のイメージをまとめていく。 ③ 島の実際の姿について得た情報を提供し、自分たちが想像したイメージと比較してみる。	地形図からイメージした根拠を見つけさせていく。 島の中に建物の数や学校の数、地図記号などをもとにして、島の人口、子どもの数、学校の様子、産業など予想できることを様々な角度から考えさせていく。

国語科学習指導案

9:30～10:30 於:ほくと組教室

指導者 川口涼子

1. クラス:ほくと組 (4年生)

男子15名 女子15名 計30名 聖徳式(個人) 平均IQ 151.3

2. 教材:『三段謎』(構え)

3. 授業設定の視点:構えを転換し、共通項を発見できるか

4. 目標:構えの転換という意識を刺激する

5. 教材設定の理由

(1) 教材観・指導観

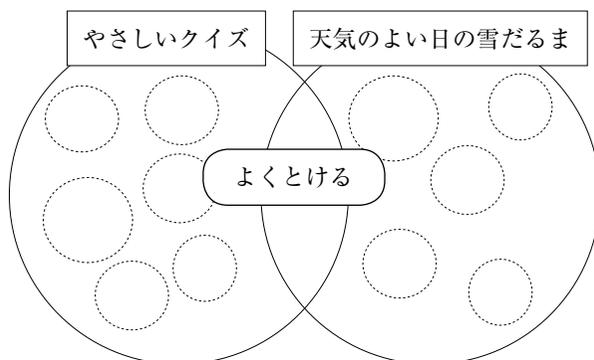
三段謎とは、いわゆる『謎かけ』のことで、昔から親しまれてきたことば遊びである。

やさしいクイズとかけて 天気の良い日の雪だるまととく そのころは
どちらもよくとけるでしょう

三段謎は例えば上記の例で説明すると

やさしいクイズとかけて (カケ)
天気の良い日の雪だるまととく (トキ) そのころは
どちらもよくとけるでしょう (ココロ)

の3つの部分に分けられる。カケとトキに『共通することば』がココロとなる。ここでいう『共通』とは、そのトキとカケ、2つの対象物にまつわるイメージや事柄のうち『文字』においてという意味である。つまり両者のイメージのなかにある同音異義語を見つけ、その意外性を楽しむのが三段謎ということだ。『ダブルミーニング(掛詞)』を楽しむのがこの三段謎である。図で表すならば以下のようなになるだろうか。



三段謎を解く・作るには、このダブルミーニングを探す必要がある。ということは、そのためにはさらにその2つの対象物に対するイメージを数多く思いつく必要や、様々な視点でその対象物をとらえる必要がある。言葉の流暢性・巧緻性が問われる。言葉の流暢性・巧緻性を発揮するためには自分自身をその対象物に対して様々に立ち位置を変えていかねばならない。この立ち位置が『構え』であり、それを変えていくことが『転換』である。また、さらなる『転換』が必要になる。『ココロ』は単なる『共通したイメージ』ではなく、掛詞になっていなければ言葉遊びの面白さにたどり着かない。『ココロ』は『共通したイメージ』であり『掛詞として成立している』ことが必要で、そこへの2度目の構えの転換を要求される。これは作り手だけではなく解き手にも必要な『構えの二段転換』と言える。この三段謎を解く・作るために必要な『構えの転換』を本授業では刺激をしたい。『構え』とは『対象に対する見定め方』である。その転換という意識を刺激する目的で扱う。児童が自分自身の構えを自由自在に転換させていく様を見届けたい。

(2) 児童観

「構え」とは、『その物事に対する時の人間らしい見定め方』である。また物事だけではなく『場に対する自分の在り様』ともいえるだろう。私たちは日々の生活の中でその構えを何度も切り替えながら生活をしたり仕事をしたりしている。が、それを『意識して切り替える』のは生きる技術として少し高度であり、精神的に発達した人間の生きる方法のひとつであろう。

10歳という成長において大きなポイントをこれから迎える児童である。これまで幼さゆえに見通しの効かない一方通行であった児童の構えを、周囲がよく見えるような、そして互いにやり取りできるような柔軟な構えにさらに昇華させていく必要がある。そのために本授業がこの時期に設定されていると考える。本授業を児童のさらなる精神発達のための刺激としたい。

また、本クラスの知能構造を見ると、集中思考のFQの値が他のFQに比べて秀でている。ある言葉からイメージを引き出すことさえクラス全体で乗り越えてしまえば、それらを上手に思考していくことが期待される。

《知能構造のプロフィール—クラス平均—》

知能指数	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
151.3	154.3	144.0	155.9	148.5	151.4	150.5	164.6	141.4

6. 指導計画（4時間扱い）

1. 三段謎を解く
2. 三段謎の仕組みをとらえる …… 本時
3. 三段謎を作り、お互いに解きあう

7. 本時の目標

三段謎の仕組みをとらえ、三段謎を作ったり、解いたりする。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導上の留意点
<p>授業の構えを作る</p> <p>授業の目標を知る</p>	<p>素読を読む 『太平記』</p> <p>三段謎を作ろう</p> <p>ある言葉から思いつくものをたくさん挙げる。</p> <p>そのなかから『使えそう』なるものを考える。</p> <p>自分でも作ってみる。</p>	<p>姿勢を正す。 気持ちを正す。</p> <p>『使えそう』とは 『ココロになる』 つまり 『トキ・カケ両者に共通するイメージかつ掛詞になっている』 に気づかせる。</p>

英語科学習指導案

9:20～10:20 於：学習室

指導者 藤石勝巳

1. クラス名：のぞみA組 (5年生)

男子13名 女子3名 計16名 聖徳式 (個人) 平均IQ 175.1

2. 授業設定の視点

一人ひとりの個性や能力に応じた学習。個々の子どもたちは意欲的に授業でも取り組んでいる。語学の学習においては特に、人前で声を出すことを恥ずかしがらず、また子どもが他の子どもから学ぶことの大切さを意識させていければと思っている。

3. 授業の題目：“Four Seasons” (4つの季節)

4. 題目について

聖徳学園では英語の授業を1年生から行っている。低学年では主に英語の音に慣れることを目標としている。そのため子どもたちの身近にある「教室にあるもの」、「動物」、「家の中にあるもの」、「町の中にあるもの」、「職業」、「乗り物」などの語彙を英語で紹介し、日本語にはない英語の音に慣れさせていく。また多くの英語の音を通して、体を動かしながら自然に英語のリズムやイントネーションが身につくようにしている。そして英語の文字の基本となるアルファベットの大きい文字、小さい文字を練習し、さらには文字と発音の関係を知る基礎となるフォニックスアルファベットを身につけることで、その後の英語の文字や文の読みに発展させていく。4年生では、低学年で身につけた基礎をもとにして、聞く英語から少しずつ自分について話す英語へと広げていく。文字についても少しずつ単語レベルの読みから文を読むレベルへと発展させていく。特に4年生では夏に全員参加の2泊3日のイングリッシュキャンプを実施している。今まで学習してきた内容を総復習すると共に、今後の英語学習の仮体験を行う。キャンプでは少人数のグループにそれぞれネイティブの先生が一人担当し丸々3日間英語漬けになりながら英語を実践体験するキャンプである。成田空港近くのホテルに滞在し、宿泊している航空会社のキャビンアテンダントやパイロットの方を夕食に招待したり、成田空港に行き、出国前の外国人の方にインタビューも行う。それらの活動を通して、実際に英語を使ってコミュニケーションする難しさと楽しさを子どもたちに肌で感じ取ってほしいと考えている。5年生になると、絵本やテーマに基づいた英語学習が中心となる。そして6年生ではさらにテーマを広げ、「水の循環」、「太陽系」、「世界遺産」など、英語を通して環境問題などにも目を向けさせたいと思っている。

今回扱うテーマは「4つの季節」である。3、4年生の時に既に単語レベルでは季節について学習してきた。その内容をさらに発展させ、季節に特徴のある英語表現を自然な形で身につけてくれればと願っている。

5. クラスの実態

5年生はこの学年から能力別クラス編成を行なっている。1クラスをAとBの能力別に2グループに分け、週の3時間の英語の授業のうち、2時間は日本人の英語の教員が指導し、1時間をネイティブの外国人教師と日本人教師のチームティーチングを行っている。本時のこのAクラスは日本人教師のみの授業となる。

このクラスはまだ4月にクラス替えがあったばかりで、子どもたちも教員も新鮮な気持ちでこの2か月間頑張ってきている。基本的な英語力は身につけている子どもたちで、熱心に英語を発音し、一生懸命取り組んでいる子どもたちである。ただその元気な取り組みを大切にしながらも、コミュニケーションで大切な「しっかり相手の話も聞く」、「お互いから学ぶ」ということにも留意しながら指導していきたい。

6. 目標

- ① 4つの季節を表す英語表現を身につける。
- ② 絵本の表現を通して英語の構造を自然な形で身につける。

7. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点および留意点
あいさつ	1. 挨拶をする。 2. 歌を歌う。	• 大きな声で、正しく発音されているか。
前時までの復習	3. 4つの季節の英語の表現。 4. 簡単なゲーム。	• しっかり聞き取れているか。 • 正確に発音できているか。
本時の活動	5. テキストの表現を確認。 6. ゲームや活動を通じた練習。 7. プリントなどを使ったまとめ。	• 既習の内容と関連させて • 声が出ているか。 • 友達の発言に耳を傾けているか。
まとめ	8. あいさつ。	

英語科学習指導案

9:20～10:20 於：のぞみ組教室

指導者 藤原陽子

1. クラス名：のぞみB組 (5年生)

男子13名 女子4名 計17名 聖徳式 (個人) 平均IQ 148.6

2. 授業設定の視点

「一人ひとりの個性・関心、能力に応じた英語学習」

自分のことを伝えたい、相手のことを知りたいというコミュニケーションの原点を大切にしながら、友達の発話からも学ぶことを意識させるようにしている。そのため、しっかりと聴き、相手の目を見ながらはっきりとした声で伝えられるよう常に働きかけている。それぞれの児童の興味や特性に鑑み、一人ひとりが主人公となれるよう問いかけや教材などを工夫し、自発的で意欲的な取り組みができるように促していく。

3. 授業のテーマ：“The Four Seasons” (四つの季節についての表現を学ぶ)

4. テーマについて

このテーマについては3年生で“Round and Round the Seasons Go”という絵本を読みながら、季節は巡り循環することを英語を通して理解し、それぞれの季節に関する言葉や簡単な表現をすでに学んでいる。

5年生ではさらにスパイラルに理解を深めていくことが目標である。各季節の特徴を表す16の文を理解して言えるように練習していくが、それらの一部を挙げると以下のようなものである。

The air is sweet.

The cicadas are loud.

Pumpkin pie is tasty.

Christmas lights are twinkling.

Mornings are chilly.

視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚を使いながら四つの季節を感じられるようになっていく。アメリカ出身のネイティブの先生と一緒に考えた文なので異文化の香りを感じることもできる。これらの文の内容を理解するとともに、16種類の形容詞も自然に身につけられるよう毎回の授業で練習を重ねていく。そして、“is”と“are”の使い方の違いにも気づきながら、さらに理解を深められればと考えている。

また、3年生から取り入れているフォニックスを活用しながら、“I am a Bunny”という絵本を滑らかに読める達成感も経験させたい。

5. クラスの実態

初めて受け持った学年である。初回の授業から手を上げて発表する児童が数多く見られ、話すのを楽しそうに思っている様子、口に出して言ってみようという意欲が十分に感じられる。友達のやる気を自分のエネルギーに変えられる児童たちである。その特性を活かし、一人ひとりが英語を発話する時間をできる限り多く取って、自信をもって取り組めるように育てていきたい。どの児童にも長所を自覚させ、それぞれが伸び代を更に伸ばせるよう働きかけていく。

フォニックスの学習は、単語を読むこと及び書くことから文を書く段階へと生かされている。書く作業では各自の特徴や個人差が出てくるので、苦手意識が出てこないよう丁寧に進めていきたい。

6. 目標

- ① 英語の楽しさを知る。

英語の指示を聞いて、様々なゲームやアクティビティを楽しむ。

- ② 英語を読み内容を理解する。

- ③ 四つの季節の特徴を表す語彙や表現を身につける。

- ④ 英語の文を書く。

フォニックスを活用して書く分野においても自信をつける。

7. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点および留意点
あいさつ	1. 挨拶をする。 2. 簡単な質問をする。 3. 歌を歌う。	●元気に大きな声で発話しているか。
フォニックスの練習	4. フォニックスのルールを知る。	●正確に発音できているか。 ●正確に書けているか。
四つの季節の語いや特徴の練習	5. 各季節を表す文に慣れる。 6. 絵本やゲーム、アクティビティを通して理解を深める。 7. 到達度の確認をする。	●声が出ているか。 ●正確に言えているか。 ●友達の発言に耳を傾けているか。
あいさつ	8. 挨拶をする。	

歴史科学習指導案

9:20～10:20 於：はやて組教室

指導者 板橋 裕之

1. クラス名：はやて組 (5年生)

男子 27名 女子 7名 計 34名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 160.9

2. 授業設定の視点

激動の時代を生きぬいた吉田松陰の一生をたどりながら、彼の生き方・考え方に迫ると共に、歴史学習の根本である歴史を動かすものは人間であることを理解させる。

3. 主 題：人物伝「吉田松陰」

4. 主題について：

本校における「人物伝」学習のねらいは、歴史上の人物がその時代の中で生き抜いたその生き様をとおり、その人のものの見方・考え方に児童の視点から迫ることであり、その評価は児童主体の歴史学習という観点からも一人ひとりの児童にゆだねられることになる。その結果として、いつの時代においても様々な階層の人、一人ひとりが社会との関わりの中で社会に影響を与え歴史を動かしてきた事実を知ることであると言える。そして、その知るということは、児童一人ひとりが社会を見る視点と社会を創造する基礎を養うことに繋がらなくてはならないという歴史学習の理想が込められていると考えている。

以上のことをおさえたうえで社会の発展という観点に立って一つの時代を見た場合、人物伝で扱う人物は、各階層の人々がその対象となるのであり、民衆を支配する側の人々の行動や業績、また偉人といわれた人々の業績から歴史を見ることも可能であろうし、その逆に、抑圧されてきた名も無き民衆を中心に扱うことも可能であるといえる。更に言うならば、授業を成立させるだけの資料が揃いさえすれば、身近な人物を取り上げることも人物伝として成り立つといえる。なお、どの人物を扱うにしても、児童の発達段階にあった形である程度歴史的背景をおさえ、そして、様々な人々との関わりといった事をおさえていく必要はあろう。ただし、本校では「人物伝」は「昔話」の発展として位置づけられており、そういう意味では人物伝を物語的に扱う側面を持っておりより確かな客観性という点では、5年生の2学期から行われる「日本通史」の中で当然引き継がれていくことになる。

さて、今回人物伝として扱う「吉田松陰」は、黒船来航、明治維新への幕開け前夜となる激動の時代に生き、僅か 29 歳という若さで刑場の露と消えた人物として知られている。

彼の生き方や考え方に迫る時、尊皇・勤王の世の中に立ち戻ることを目指す思想家であり、一貫して尊皇攘夷を目指しその結果倒幕へと突き進む活動家といった視点で見ることができであろうし、また、明治維新といった新しい時代を切り開いた木戸孝允や伊藤博文などを育てた偉大な教育者とする視点もある。しかし、松陰の生き方を知る中で感じることは、「至誠にして動かざる者は

未だ之れ有らざるなり」といった確固とした信念のもと、己の魂の指さす方向に純粹無垢に一点の私利私欲もなくまっしぐらに進んでいくその生き様であり、自分に対しあくまでも誠実に生きようとする姿勢ではないだろうか。それは、「常識という概念に惑わされず、現状に満足することなく志を強く持ち自分の信じる道を進むべきである」という意味で語られた「諸君、狂いたまえ」といった名言や「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし」といった現代にも十分に通じる名言、更に「死して不朽の見込みあらばいつでも死ぬべし。生きて大業の見込みあらばいつでも生くべし」といった名言からも十分に理解することができる。

そして、刑場の露と消える前に書き残した下記の三つの「辞世の句」には、彼の思想や考え方をより明確な形で読み取ることができると言える。

両 親 へ

親思う 心にまさる 親心 今日音ずれ 何と聞くらん

塾生・同志へ

身はたとえ 武蔵の野辺に 朽ちぬとも 留めおかまし 大和魂

自分の気持ち

吾今国のために死す 死して君親にそむかず
悠々たる天地のこと 鑑照明神にあり

そのものの見方・考え方は、小学5年生という発達段階において、時には無批判的にその思想も含めて受け入れてしまうといった難しさ、危険性もあるが、同時に「純粹無垢に一点の私利私欲もなく」「自分に対しあくまでも誠実に生きようとする」姿勢は共感することができるものであり学びやすくもあるといえる。そこで、当時の社会情勢やそれぞれの階層の人々の考え方や関わり方といったことについて教師側から必要最低限ふれる中で、単に歴史事象を知るといった歴史学習ではなく、歴史に一定の影響を与えた人物の生き方を自らの視点で見ることができればと考える。そして、それは主観的なものの見方といったものになりやすいであろうが、様々な児童の様々な考え方を互いに知る中で、「様々な人が様々な関わりの中で歴史に影響を与えてきたのだ」といったことを感じさせることができるのではと考えている。

本授業では、特に激動の時代の象徴的な出来事である「安政の大獄」の中で、松陰がいきついた考えと行動はどのようなものであったのか、また、それをそれぞれがどう評価するかといった点と共に、「至誠にして」を最後まで貫き通す中で自らの運命を受け入れ、最期の時を迎え書き残した「辞世の句」に凝縮されている彼の生き方・考え方をこれまでの半生を振り返りながら考え、自らの視点で見つめられればと考える。

なお、本校では修学旅行において、今回の舞台となった山口県萩市にある松下村塾や、松陰の生

誕地や松陰神社などを見学し、その足跡をたどることによって、学習の一つの区切りとしていることも最後に添えておくことにする。

クラスの実態：

本校の歴史科では、3年生において毎学期末の短縮の時間を活用し「昔話」を歴史授業として学習し、更に4年生においては「人物伝」（「釈迦」「聖徳太子」「豊臣秀吉」「徳川家康」）を学習することになっている。その学習過程の中で、5年の現段階において、どの児童もある程度歴史的概念といったものを身につけ、また、人物の行動を通し歴史を学ぶ視点が養われてきているといえる。

それは、4月の最初の授業において、吉田松陰の「肖像画」を手がかりに、その人物から受ける印象や現代との違いを学習したところ、服装、髪型、姿勢等々からそれぞれがその人物に興味を持ち始めるとともに、自分なりの視点で現代との違いを指摘していたことにも表れていた。

更に、歴史科では一人ひとり個性あふれるノートを創り上げるといったことにも力を入れてきているが、それは、授業を主体的に学習していく手段になるだけではなく、歴史科ならではの想像力、つまり歴史的概念形成といった視点からも活用できるからであり、更に、本校で言う「客観的思考力」「論理的思考力」といったものを保障していくことになるからである。現段階においては児童の多くが教師が板書したものを一生懸命に書き写すので精一杯といった様子ではあるが、それでも、楽しそうに書き写し、中には、本人が大切と思う場面を想像絵として表現したり、自らの言葉も添えて詳しくまとめている児童も目にする。

一方で、全てを無批判的に受け入れてしまうといったことや、歴史上の人物に立って考えると行った立場の転換という点での弱さ、社会事象と結びつけて考えてみるといった姿勢での弱さも感じられるが、それは、これから徐々に養われてくることになるであろう。

5. 目 標

幕末期の社会の様子を理解する中で、吉田松陰の業績と行動を探り、彼のものの見方や考え方について自らの視点で考える。

6. 指導計画：14 時間扱い

1. 松陰の生きた時代
2. 少年時代
3. 遊学
4. 密航
5. 野山獄
6. 松下村塾
7. 安政の大獄（本時）

—三つの「辞世の句」を通し、松陰の生き方・考え方を見つめる—

7. 本時のねらい

三つの「辞世の句」を通し、松陰の生き方・考え方を見つめ、自分なりの見方を養う。

8. 本時の授業展開

指導過程	児童の学習内容	指導上の留意点
<p>1. 安政の大獄という出来事の中で、松陰が取った行動の背景を考える。</p>	<p>黒船来航から読み取れる世界の中の日本について、その置かれている状況を今一度確認する。</p> <p>安政の大獄という弾圧の中にもみることのできる社会の混乱と様々な立場の人々の行動を想像し考える。その中の一人である松陰の行動とその背景を考える。</p>	<p>一時間目に扱った社会の情勢に立ち返る（復習）。</p> <p>開国と攘夷、尊皇と佐幕、公武合体という複雑な状況については教師が簡潔に説明する。「これを見のがして何の日本人ぞ」という立場の中で一貫して貫かれる「至誠にして」をおさえながら左記について考えさせる。</p>
<p>2. 伝馬町に送られる前夜の行動を知る中で、家族や門弟と松陰の関係を理解する。</p>	<p>再び野山獄に入牢した松陰の取った行動について、教師の話を書く。「絶食」を思いとどめさせた母の手紙も含めて、互いの絆の深さを考える。</p>	<p>松陰を迎え入れた妹、母の行動ぶりに関しては、教師の語りの中で想像させたい。</p>
<p>3. 評定所での取り調べの中で松陰がとった行動から彼の生き方考え方を考える。</p>	<p>「至誠にして」と共に「吾今国の為に死す、死して君親に負かず……」に表れている確固たる信念のもと、評定所で陳述するその内容から彼の生き方・考え方を考える。</p>	<p>「梅田雲浜との関係」「御所内の落し文」の二つの嫌疑での取り調べにも関わらず、国のあり方、間部暗殺計画等について陳述する松陰像に迫る。</p>
<p>4. 三つの「辞世の句」を読み取る中で松陰の歴史のとらえ方、ものの見方・考え方に迫る。</p>	<p>両親へ 「親思う心にまさる……」</p> <p>塾生・同志へ 「身はたとえ 武蔵の野辺に」</p> <p>自分の気持ち 「吾今国のために死す……」</p> <p>以上の「辞世の句」について、それぞれ、その背景をこれまでの学習を振り返る中で意味を考え、松陰の考え方に迫る。</p>	<p>一つひとつの辞世の句について、その意味するところをこれまでの学習をすべて振り返り考えさせたい。</p> <p>松陰の生き方に共鳴するというよりも、幕末から明治維新へと大きく時代が移り変わろうとする中で生きた一人の人物の行動の仕方、考え方から、「歴史を動かすものは人間である」といった事を理解できればよい。</p>

<p>5. まとめ 一人ひとりの視点から松陰を捉える。</p>	<p>それぞれ感想を述べあう。</p>	<p>また、その評価に関しては、それぞれ自由に言わせたいし、評価が分かれることを期待したい。</p>
-------------------------------------	---------------------	--

数学科学習指導案

9:20～10:20 於：くろしお組教室

指導者 齊 藤 勇

1. クラス名：くろしお・はやぶさA組 (6年生)

男子13名 女子10名 計23名 聖徳式(個人)平均IQ 181.9

2. 授業設定の視点：様々な考え方をする中で、創造的知能を伸ばす学習指導

3. 主 題：星型N角形

4. 主題について

本校では独自のカリキュラムにより、多角形の単元を5年生で扱う。初めに正多角形の名称や辺・頂点・角についてなど基本的性質を学習する。次に、コンパスを用いて円周を切る方法や分度器を使って中心角を等分する方法を用いて作図を行う。更に、多角形の内角の和と外角の和の求め方について考えさせる。

本時は、5年生の時に学んだ多角形の発展として、星型N角形を扱うことにした。星型N角形とは、いくつかの点を何点か飛ばして結んだ時に得られる図形である。星型五角形は『ソロモンの星』『五芒星』、星型六角形は『ダビデの星』『六芒星』と呼ばれ、古くから人々に親しまれてきた形である。また、エチオピアやイスラエルの国旗にも使われている。このように歴史ある美しい形の頂角の和を考えさせていきたい。星型五角形・星型七角形の頂角の和の求め方は何通りもあるので、今まで学んできた図形の性質を活用して色々な解法を発見してくれると思う。

5. クラスの実態

男子と女子の人数がほぼ同数であり、一斉授業では、男女ともに積極的に挙手する児童が多い。また、友達の意見をしっかりと聞くことができるので、そこから議論が生まれ内容が深まることが多々ある。一方個別課題の時は、特に難問に対して粘り強く取り組んでいる。

図形の課題には興味を示すので、柔軟な思考を生かして様々な解法を発見してほしいと思う。本クラスのIQとFQ(知能因子指数)の平均は、以下の通りになっている。本時の授業では「図形」「記号」や「拡散思考」「集中思考」を刺激していく。

本クラスのIQとFQ(知能因子指数)の平均は、以下の通りになっている。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
181.9	190.3	179.9	175.5	175.1	192.9	177.7	186.0	177.7

6. 指導計画

星型N角形（5校時中、本時は1校時目）

7. 本時のねらい

今まで学習した図形の性質を用いて、星型N角形（ $N = 5 \cdot 6 \cdot 7$ ）について頂角の和の求め方を色々と発見することができる。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
1. 多角形について復習する。	5年生の時に学習した、多角形について簡単に確認する。	正多角形と多角形の違いについても触れる。
2. 星型五角形を提示して、その頂角の角の和の求め方を考えさせる。	多角形の仲間に、『星型五角形』があることを知る。 ワークシートに星型五角形の頂角の和の求め方を書く。一つ解法を発見した児童には、別の方法を考えさせる。	星型五角形はソロモンの星と呼ばれ、特別な形であることを知らせる。
3. 自分の発見した解法を発表させる。	黒板に提示した図を用いながら、自分の考えた頂角の和の求め方を発表させる。 《予想される解法》 <ul style="list-style-type: none"> • 5つの頂角を三角形の内角に集める • 五角形の内角・外角を利用する • 平行線を利用する 	友達の考え方をしっかりと聞くようにさせる。 星型五角形の頂角の和は、 180° になることを確認させる。
4. 星型六角形・星型七角形にも挑戦させる。	星型六角形・星型七角形の頂角の和についても考えさせる。	星型七角形については、一点とばしのものとする。 時間に余裕があれば、規則性についても触れる。

数学科学習指導案

9:20～10:20 於：はやぶさ組教室

指導者 中野恵子

1. クラス名：くろしお・はやぶさB組 (6年生)

男子17名 女子10名 計27名 聖徳式(個人)平均IQ 168.5

2. 授業設定の視点：工夫しながら問題解決にいたる過程で、創造的知能を伸ばす学習指導

3. 主 題：ウサギの増え方の考察 (フィボナッチ数)

4. 主題について

数学を学ぶよさの一つに身の回りにあるいろいろな事象を簡潔に表現し、考察することがあげられる。単なる知識として教えるだけでなく、自力解決の場面を設定し、実際に問題解決の過程において、図や表を用いる等の工夫を通して試行錯誤ができるような題材を取り入れることで、児童が数学的な見方や考え方を高め、数学の素晴らしさを一層実感できるようにしたいと考えている。

本校では、数列の単元を5年生で扱う。規則性を発見し、数を体系的に捉えられるような学習内容となっている。また、簡単な等差数列の和を工夫してもとめたり、クラスの実態によっては、等比数列や階差数列についても扱う。そして、自ら公式を見つけ出していく態度を養い、法則の発見につながるような指導を心掛けている。

本時は、日常に潜む数学を用いるよさ、更に美しさに触れることができる題材として、イタリアの数学者レオナルド・ダ・ピサ(レオナルド・フィボナッチ)(1170年頃～1250年頃)が「算盤の書」の中で紹介している「ウサギの問題」をもとに、その増え方に着目し、規則性について考察する内容にした。「ウサギの問題」とは、この中で取り上げた問題の一つである。扱われた数「フィボナッチ数」は、日常生活の中で何気なく見ている自然界の植物や生物の中にも多く潜んでおり、黄金比とも密接な関係を持っていることが知られている。この歴史的な問題を絵、図や表を用いて、一定の規則に着目し、問題解決を試みる過程で、数学を学ぶよさや楽しさを味わうことができるようにさせたい。また、その解決にいたるまでの過程には、本校の児童ならではのアイデアが期待される。

5. クラスの実態

一斉授業では、積極的に挙手する児童が少々限られてはいるが、友達の意見にしっかりと耳を傾けることにより刺激を受け、そこから疑問や議論が広がり、各々が自分の意見を持ち、発表することができるようになってきた。また、個別の課題にも最後まで集中して取り組むことができる。

特に記号の課題には、興味を持って取り組む傾向が強いので、問題を解法する過程を楽しんでほしいと思う。本クラスのIQとFQ(知能因子指数)の平均は、以下の通りになっている。本時の授業では「記号」や「拡散思考」「集中思考」を刺激していく。

本クラスのIQとFQ(知能因子指数)の平均は、以下の通りになっている。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
168.5	180.9	163.9	160.5	164.5	178.2	157.4	176.7	165.6

6. 指導計画

ウサギの増え方の考察 (数列…15時間、本時は発展学習)

7. 本時のねらい

問題を解決するまでの過程において、規則性に気づき、身近なものに潜む数学に興味を持てるようにさせる。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
1. 問題の意味を理解させる。	<p>ウサギの問題</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>生まれたばかりの1つがいのウサギは、2ヶ月目から毎月1つがいのウサギを産むとします。すべてのウサギがこの規則に従って生き続けるとして、1年後には何つがいのウサギのウサギがいることになりますか？</p> </div> <p>(予想を立てる)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「15くらいかな？ 20かな？」 「100は、ないだろう」 	<p>問題を理解させるため、ウサギが描かれた提示を用いて、説明をする。</p> <p>推測させ、子どもたちの意見を聞く。</p>
2. 個々に試行錯誤しながら、問題解決の方法を工夫させる。	<p>ワークシートを配り、絵、図、表などを用いて、導き出していく。</p>	<p>特にどの方法でまとめる等の指示はせず、個々に自由に考えるように助言する。</p>
3. 自分の考えをまとめ、解法を発表させる。	<p>独自の図や表などを用いて考えをまとめ、発表する。</p> <p>(予想される発言)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「前の月とその前の月のウサギの数が次の月のウサギの数になる」 「樹形図みたいなもので表してみたら、すごい長くなった」 	<p>ホワイトボードにワークシートを映し、発表の声や姿勢に気をつけさせる。</p> <p>友達のを考え方をしっかりと聞くようにさせる。</p>

4. フィボナッチ数を紹介し、自然界にも多々見られることを示し、興味をもたせる。	ホワイトボードに映された自然界に隠れたフィボナッチ数を見つける。	興味関心を引き出せるようにする。
--	----------------------------------	------------------

数学科学習指導案

9:20~10:20 於:MP ルーム

指導者 谷 口 優

1. クラス名:くろしお・はやぶさC組 (6年生)

男子8名 女子3名 計11名 聖徳式(個人)平均IQ 151.5

2. 授業設定の視点: 試行錯誤する中で、創造的知能を伸ばす学習指導

3. 主 題: 正多面体の限界を考える

4. 主題について

本校では4年生の「立方体と直方体の性質と求積」という単元から立体図形の学習が始まる。ここでは立方体・直方体の辺・面・頂点について学習し、平行・垂直の関係などを考える。また、見取り図や展開図についても扱い、辺や面のつながりについても考える。

5年生の「円の性質と求積」という単元では円や扇形の性質の他、円を利用した正多角形の作図方法も学ぶ。その際に多角形の内角についても考える。

6年生になり、本単元では角柱・円柱・角錐・円錐を中心に基本的な性質や表面積、体積について学習する。多面体も扱い、本題目においては正多面体に注目する。正多角形を組み合わせる様々な立体を作る活動を通して、つくることのできる正多面体に限りがあることに気付いていく。一人ひとりが「何となく」感じる気付きを共有することで確かな理由に近づけるとよい。

5. クラスの実態

閃いたことがあると積極的に発言する児童が多いクラスである。友達の意見を参考にして、更に考え方を広げられるように指導している。正多角形を組み合わせる作業の中で得た様々な気付きを共有し、友達の意見も加えることでより考えを深めてほしい。

本時の授業では「図形」の因子を刺激し、「拡散思考」、「集中思考」を伸ばしていく。

本クラスのIQ(知能指数)とFQ(知能因子指数)の平均は以下の通りになっている。

	IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
平均	151.5	159.9	143.5	150.8	146.6	158.5	145.7	160.3	146.6

6. 指導計画 (15 時間扱い)

立体の種類 2 校時

柱体の性質 2 校時

錐体の性質 2 校時

多面体の考察 2 校時 (本時は 2 校時目)

立体の見取図・展開図 …… 3校時

立体の表面積・体積 …… 4校時

8. 本時のねらい

正多面体を作ろうと試行錯誤する中で、その限界と理由に気付く。

9. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
(1) 正多面体の定義について確認する。	正多面体の条件（以下）を確認する。 ・すべての面が合同な正多角形 ・すべての頂点の周りの面の数が等しい	・ノートにまとめ、共有させる。
(2) 個々に試行錯誤しながら、正多面体を作らせる。	正多角形を組み合わせて正多面体を作る。 できた立体を発表する。	・5種類すべて出なくてもよいが、なるべく多く考えさせる。
(3) 正多面体について発見したことを発表させる。	様々な正多面体を作ろうとする中で気が付いた限界についてその理由を発表させる。 〈予想される意見〉 ・正六角形では平らになってしまう ・立体になるのは、正三角形、正方形、正五角形の場合のみ ・1つの頂点に並べられる枚数には限界がある	・友達の考え方をしっかりと聞くようにさせる。 ・(2) で出てこなかった正多面体がある場合は作ってみる。
(4) まとめ	正多面体の限界と理由をまとめる。	・ノートにまとめ、共通の理解とする。

全 体 会

10：30～11：40 於：講 堂

1. あ い さ つ 「英才教育の成果報告」

園長・校長 和田 知之

2. 園児・児童発表 5 歳児 斉 唱
4 年生 合 唱

3. 研 究 発 表 「7つの習慣」を子どもたちに
～「リーダー・イン・ミー」を授業に取り入れて～

高学年主任 古賀 有史

令和元年度の研究活動計画

研究部の活動計画

1. 研究テーマについて

一昨年まで『英才児の創造的知能の開発と育成』というテーマで研究を進めてきた。“創造性”については「創造的思考」「創造的技能」「創造的態度」の3つの側面からとらえ、研究授業を行い、また中間テストや期末テスト、児童の作品なども通して創造的知能とは何かについて議論を行ってきた。その成果については「英才児をさぐる」委員会に引き継がれ、今後成果をまとめていく予定である。また現在は「知能開発を目指した学習指導」というテーマを設定し、研究を進めている。

2. 実践研究について

本校の実践している英才教育には、先行研究も学ぶべき先例もほとんどなく、したがって、独自に指針を定め基盤を作りつつ、進んでいく必要がある。そこで、各個人の実践研究も、一般的な実践研究とは区別して、テーマ設定を行い取り組んでいる。個々の実践研究については、研究紀要を作成し、公開研究発表会などで配布も行っている。実践研究の設定の指標は以下の通りである。

- (1) 指導力を高める実践研究は、日々行われている教育実践の改善や問題の解決に役立つものでなければならないし、その成果が児童の学習や生活に貢献できることを目的とする。
- (2) 研究対象は専門性や関心を生かしながら実践の中に定め、本校の教育方針や教科研究部の方針を踏まえ、教科の当面する課題を考慮して決定することとする。
- (3) 4月末日までに教科研究部会において主題の報告を行い、その問題点の検討ののち決定する。合わせて研究方法上の見通しについても検討し、教師間において目標や手順についての共通理解を図る。
- (4) 教科研究部においては研究プロジェクトとしての立場から協力し、実践研究がマンネリ化、独善に陥らないように相互評価しながら検討して、よりよい研究となるように創意工夫する。
- (5) 7月末日までに教科研究部会において実践研究の中間報告をし、進行の状況を説明したり軌道を修正したりして検討を加える。
- (6) 夏季研修において実践研究の中間およびまとめの報告をし、今後の実践に役立てるために各教科分科会等で相互に批判し共通理解を図る。評価の主な観点は、授業を通して児童の学力や行動がどのように変わっていったかに置く。

3. 校内の研修会につて

校内の研修会は春と夏の2回、児童の休みの期間に数日にわたって行っている。夏の研修会はこれまで宿泊して行ってきたが、校内で行うことになった。また「リーダーインミー」を研修も合わせて行うなど、外部からの講師も招いて行っている。加えて中・高の教員との合同の研修会も行っている。

各自の実践研究については、夏の研修会で発表の機会を設け、成果を共有していけるようにしている。

4. 校内の研究授業について

本校での授業研究の視点は独自のもので、教員の技量向上とは一線を画している。いわゆる一般的な授業研究とは設定自体が異なっており、本校では、**精神発達の最前線を捉え、子どもの創造的知能を刺激することのできる方向で、授業研究のテーマを考え、研修を行っている。**もちろん新人の教員の研修も一方で行われ、その中で技能向上を図っている。本校の授業研究の指標は以下の通りである。

- (1) 授業研究の発表形式は、紙上発表やビデオ公開発表、公開授業の三つとする。内容は技術指導、研究発表、試行的研究、課題研究等について検討を行うこととする。
 - (2) 授業研究は、教材の解釈や児童理解、学習指導の技術、授業の展開などの研修であるため、その成果を日々の授業に役立てるように考慮する。
 - (3) 授業研究を通じて本校が当面する教育活動上の課題を具体的に明らかにしたり、児童の持つ特色を明らかにしたりして、教育の方法を探るようにする。また教育課程実施上の問題点を明らかにし、その改善のための資料を得るようにする。
 - (4) 教科研究部では、授業研究の基本的な方針にもとづいて作成された指導案を検討し、各教師の力を結集し指導案を作成する。検討する項目は、児童の実態把握・教材分析・授業の目標・指導案・学習環境・評価などとする。
 - (5) 教科研究部では、授業研究終了後、研究協議会で話し合われた結果をもとにして実施された授業を分析・検討し、その成果を総合的にまとめるようにする。
- なお、授業研究として設定できるものは以下のものとなっている。

- 〈その1〉 聖徳の特色ある授業に関するもの。
- 〈その2〉 英才児の反応等を対象とした授業設定や授業展開。
- 〈その3〉 二人指導制に関するもの。
- 〈その4〉 能力別クラスの実態とそれに対応した授業設定や授業展開。
- 〈その5〉 新人研修。

研究授業については全教員で授業の検討を行うものについては毎学期行うものとし、その他教科ごとにも新人研修をはじめ、必要に応じて行われている。また外部の研修会にも積極的に参加してもらい、その成果についても共有できるようにしている。

知能教育研究部の活動計画

本校では1969（昭和44）年から小学校における知能教育の実践研究に取り組んでいる。「知能教育」というのは、文部科学省の学習指導要領の内容にもなく、むしろ教科書もない。従って、教育内容（カリキュラム）から教材・教具まで全て独自に作り上げていかなければならない。

そこで、我が国の知能教育の先覚者伏見猛弥先生の指導を仰ぎ、アメリカのギルフォード教授の知能構造理論に基づき、実践を重ね、知能教育の基礎を築き上げてきた。現在は、2歳児から小学4年生までを対象にして、一貫した教育内容と方法で、「幅の広い思考力の育成」と「創造性豊かな人間性の育成」をめざした研究活動に取り組んでいる。

1. 目標及び活動内容

(1) 知能因子の分析と教材開発

知能教育の教材・教具は全て手作りのため、週一回の定例の研究会では日々新たな教材開発を中心に行っている。教材作成においては、次の点に留意して研究を深めている。

- ① 授業のねらい（知能因子）を十分に押さえる。
- ② 子どもの発達段階（興味・知識・思考）を十分に考慮する。
- ③ 単なる子どもの興味だけに流されないで、教育的価値を十分に考慮する。
- ④ 一人ひとりの子どもの能力に十分対応できるように（能力の限界への挑戦）、内容に幅をもたせ、発展性のあるものにする。
- ⑤ 学習の流れに変化をもたせるようにする。
- ⑥ 個別指導について十分に配慮する。

(2) 指導技術の向上

知能教育というのは、知識を教えるのではなく考える力を育てるわけであり、必然的に教科の学習指導法とは異なる点が多くなる。そこで毎時間の実践記録を基に、次の点をポイントにして授業研究を深め、指導技術の向上を図っている。

- ① 一人ひとりの子どもの能力と個性に応じた指導を行う。
- ② 意欲・集中力を育てる。
- ③ 教えるのではなく、考えさせることに重点を置く。
- ④ 思考過程を大切にする。（「できた・できない」の結果だけにこだわらない。）

(3) 実践結果の分析と資料作り

2. 今年度の活動の重点

- (1) 一人ひとりの個性と能力に応じた指導の充実。能力を更に伸ばす指導法の研究。
- (2) 二人指導などの聖徳の特色を活かした指導方法の研究を深め、指導技術の充実を図る。
- (3) 『聖徳式知能検査法』の実施結果を分析し、充実を図る。
- (4) 授業での実践を通しての研究を継続的にまとめ、常に新しい教材開発。

国語科研究部の活動計画

1. 目 標

- (1) 言葉に先行する精神発達の最前線における児童の成長の課題と児童を接触させることにより、その精神発達を促そうというのが私たちの基本的考え方である。
- (2) そのためには、英才児に特有の思考・感情および意識の発達の実態を捉え、その基礎資料に基づいた教材の開発、授業方法の研究がなくてはならない。

2. 研究課題

成長の課題を授業として取り上げるためには、これに適した素材がなくてはならない。したがって、検定教科書をそのまま使用せず、幅広くさまざまな文章を集めて教材としている。私たちには成長課題の特定と教材の選定が何よりも重要なことである。

そこで、人間の意識活動を大きく、感情・思考・構えの三つに分け、これに用具言語を加えた四本の柱によって私たちの国語の学習領域は構成されている。

「用具言語」とは言語作業的な領域を含み、主に練習によって習得するものであり、言語作法・文法事項・漢字を含む語彙などである。

「感情」の領域とは、気持ちであるから喜怒哀楽をという捉え方ではなく、子どもたちの感情発達の階梯を見届ける姿勢をとっている。例えば、「ごんぎつね」はひとりぼっちを、「白いぼうし」は現実・非現実を考えるための材料となる。この場合授業は、ひとりぼっちという感情をめぐる子どもたち一人ひとりの課題・問題点を整理する場となる。

「思考」とは感情とともに人間の精神活動の重要な一部である。人間の思考路線を、児童の中に追究する姿勢をとり、一人ひとりの思考の内容・方法・段階に接近している。

「構え」とは、身構え・気構え・心構えなどという感覚構造を示す言葉で、母国語の習得を考えると、なくてはならない視点であると考えている。われわれは、生まれたときから、人間らしい対象の定め方を習得し、その対象と人間の交わりにおける人間限定のあり方を構えと呼んでいる。

3. 今年度の重点目標

① 聖徳学園が目指す国語科教育の追究

「思考」「感情」「構え」の三領域と「言語事項」を教材の基本構造と捉え、子どもの成長課題に接近するといった点が本校独自の基本的な考え方であり、その考え方は常に発展するものと考えている。そこで、カリキュラム成立時の考え方に立ち戻るとともに、児童の成長発達という観点から新たな成長要因を追求するとともにそれに見合った教材も積極的に見出していく。

② 教員の指導力量を高めるための研修

上記の通り、本校では、児童の精神発達という観点から領域が設定され、そのもとで教材を分析し、授業展開が考え出されている。また、同時に英才児ならではの発想の仕方をするといったことを考えたとき、教員の指導力量といったことが特に問われてくる。それに見合う研修を積むということである。

③ 卒業論文指導の充実

論文のテーマである「私と言葉」は、ことばを私という主体者との関わりで論考すること、そしてそれを発表することを目標にしている。

書きながら考える、書くことによって考える、そうすることによってまだ明確にしていなかった問題点をつかんでいく、このような姿勢と能力を6年間をかけて指導していくことになる。

数学科研究部の活動計画

1. 目標

- (1) 数量・図形などに関する、基礎的な知識の習得や基礎的な概念・原理・技能の理解・習熟を図り、的確に活用して数学的な処理・考えを生み出す能力を養う。
- (2) 数学的な用語や記号を用いることの意義について理解を深め、数量、図形の性質や関係を簡潔・明確に表現し、思考をする能力と態度を養う。
- (3) 事象の考察に際して適切な見通しを持ち、論理的に思考する能力を伸ばすと共に、目的に応じて結果を検証し処理する態度を養う。
- (4) 体系的に組み立てていく数学の考えを理解させ、その意義と方法を気付かせる。

2. 指導方針

- (1) 基本的な知識や技能が身に付くように指導していくと共に、知能開発のためにいろいろな角度から考えさせる。
- (2) 教えることより、考えさせることに重点を置く。すなわち、原理や法則を教え込むのではなく、それを児童自身が導き出せるように助長していく。
- (3) 問題解決学習や発見学習に重点を置く。
- (4) 一人ひとりの能力の限界へ挑戦させることと、一人ひとりの能力と個性を啓発し、それに応じた指導を行うために、個別学習に重点を置く。

3. 今年度の研究課題

- (1) 各単元と知能因子の関係について探り、創造性を生かした授業形態を追究する。
- (2) 基礎学力の充実及び能力の限界に挑戦させるべく、個々の児童に応じた指導と教材研究を行う。
- (3) 知能開発と数学的思考力の養成に役立つ教材教具の開発と導入。
- (4) 一人ひとりの子どもの個性と能力差に応じたきめ細かい指導を行うため二人指導制のあり方を考え充実を図る。
- (5) 本校独自のカリキュラム・テキスト教材・指導方法の再検討と熟成を図っていく。
- (6) 毎月1回実践報告会を開き、各学年及びクラスごとの指導状況・反応・反省を出し合い、系統的な学習指導の徹底を図る。
- (7) 各指導者が数学の指導に関する自主研究テーマを設定し、年間を通じてその研究に取り組む。また、その成果を互いに発表し検討を行うことにより、力量を高め合う。
- (8) 授業研究の充実を図るために、校内授業研究や教科内での授業研究を行っていく。
- (9) 聖徳の特色ある数学教育を明確にし、推進していく。

英語科研究部の活動計画

1. 活動のねらい

- (1) 前年度を振り返り、カリキュラムの精選・吟味を行う。
- (2) 子どもの活動を中心とした授業、教材に留意する。
- (3) 少人数での授業形態を活かし、一人ひとりの個性に合わせた指導に努める。
- (4) 授業形態にあわせた「評価方法」に留意する。
- (5) 異文化に触れる機会、教材の設定に留意する。
- (6) コミュニケーション能力育成のため、スピーチ活動に重点を置く。
- (7) 聞く、話す、読む、書く、の4技能を伸ばすカリキュラムを開発する。
- (8) 外国人教員とともに指導内容・方法・評価について研究する。

2. 方法

毎週行われている教科会の中で検討していく。

各教員がお互いの授業を研究し、英語科での共通の課題を見つけ取り組んでいく。

また、外部の様々な研修会等に参加し研鑽を積む。

3. 今年度の活動の重点

- (1) 子どもたちの興味関心や発達段階に応じたカリキュラムになるよう、今まで実践してきたテーマや指導内容についても一度検討、吟味していく。同時に新たなカリキュラムを導入する。
- (2) 絵本を中心に、話の内容を楽しみながら、英語の単語や表現をできるだけ自然な形で身につけられるように指導していく。そのための絵本や教材の研究に力を入れていく。
- (3) 教員から一方的な知識を与える講義式の授業に陥らないように、ゲームやその他様々な活動を通して子ども主体の授業になるよう心がける。

また、小学生は音声面で優れているので、歌やナーサリーライム・チャンツなどを通し、この時期にしか身につけられない英語の音に慣れさせる。

- (4) 高学年においては英検の内容に取り組むことで、英語の基本的な語彙力・表現力を伸ばしていく。同時に英語の自然な発音や英語の文字を読むことに慣れさせていく。
- (5) 小学校での英語教育の評価方法を考えるとき、ペーパーテストだけでは測れないものが多々ある。面接試験を行うことで、子どものスピーキングやリスニングの力を知ることができる。その面接試験のあり方についてさらに研究、工夫する。また英語学習の集大成としてスピーチに取り組ませる。
- (6) 現在のカリキュラムに基づいた授業だけでなく、定期的に世界のいろいろな国の人たちと接する機会を持てるような企画を立てる。また、英検などにチャレンジさせ、児童の英語学習の励みとなるようにする。4年生の学年行事のイングリッシュキャンプの充実を図る。
- (7) 子どもたちが将来、自ら「未来を拓く」ことができるための英語力を身につけられるように、本校独自のカリキュラムを開発、実践していく。

理科教育研究部の活動計画

1. 目 標

- (1) 各クラスに応じた授業を工夫し、児童の能力の限界に挑戦させ、学力を保障する学習指導の推進を行う。
- (2) 各学年の発達段階に応じた授業を工夫し2年生から6年生までの系統的な学習指導を目指す。
- (3) 飼育活動や観察会・見学会などの企画・実験を通して児童の科学や自然に対する興味・関心の向上をはかる。

2. 今年度の重点項目

- (1) 英才児の知能を活かした授業の実践
英才児の創造的思考を生かし、発見へとつながる指導方法・内容を開発しその実践を積み重ねる。
- (2) 諸感覚を働かせる学習と ICT 化
小学生にとって、実際に手に取って調べる体験は科学認識の原体験として、必要不可欠なものと考えられる。一方、ICT 化は、蓄積した知識や実験結果等を活用し、考察を進める上で大きな力を発揮するものと考えられる。それぞれの利点を生かした指導の在り様を探っていく。

- (3) 自然観察会の充実

〈位置付け〉①自然と直接触れる場 ②授業への興味付けの場 ③授業の発展の場

今年度の主な活動内容（予定）は、以下の通り。

- | | | |
|-------------------|----------------------|----------|
| a. 植物の観察（3年生対象） | ◇川原の草花の観察・スケッチ …………… | 10月（2学期） |
| b. 動物の観察（5・6年生対象） | ◇野鳥の生態の観察 …………… | 2月（3学期） |
| c. 星の観望会（5・6年生対象） | ◇月・惑星の観望 …………… | 12月（2学期） |
| d. 石の仲間集め（aと同時開催） | ◇石の色・粒子などの違い …………… | 10月（2学期） |

- (4) 特別授業の企画・実施

○ SSISS (Scientists Supporting Innovation of School Science) NPO 法人科学技術振興のための教育改革支援計画の特別授業を実施……特別研究理科対象

- (5) 理科実験室内書庫の蔵書の充実

図書部と連携を図りながら、小学生向けに留まらず、専門性が高い書籍に触れる場として展開していきたい。

3. 継続的に取り組んでいる項目

- (1) 実験技能の向上と安全確保を目指した指導方法の開発。
- (2) 施設を利用した校外授業の充実。
2年生『恐竜』◇国立科学博物館の見学 …………… 9月（2学期）
5年生『星』◇プラネタリウムの見学 …………… 12月（2学期）
- (3) 飼育活動（水槽）栽培活動（花壇・温室等）に関する研究。温室を活用した学習活動の充実。
- (4) 気象観測活動を通して、気象に関する研究・天気予報を行っている。
- (5) 自然のたより 2年生対象の身近な自然の観察記録。週に一度、冊子にして配布。発展的に植物画コンクールへの出品を進める。

地理科研究部の活動計画

1. 目標

- ① 「空間的な広がり」をつかませるために、さまざまな角度から地理的事象を眺め、思考させる。(2～4年)
- ② 人間関係を理解する上に於いて、自然環境を広い視野からとらえ、人間生活との関係、地域相互の関係を考察し、処理する能力と態度を育成する。(4～5年)

2. 指導方針

- ① 鳥瞰図の視点を獲得し、空間の連続性を意識しながら、地図を豊かなイメージでとらえていく能力を養う。
- ② 地図・統計の取扱いについての知識・技能を獲得し、それらを使いこなせる能力と態度を養う。
- ③ 地図・統計の中から、目的に応じて適切な資料を選択し、信頼性・妥当性を検証した上で、判断の基準の中に組み入れていく能力と態度を養う。
- ④ 諸外国の文化に対する理解を深め、国際社会に於ける日本の役割を考え、国家および世界の一員としての自覚を深める態度を養う。
- ⑤ 日本の国土の保全及び地球規模での環境問題について考える態度を養う。

3. 今年度の研究課題と教育活動

- ① 指導内容と教材の精選化
英才児の地図学習のあり方について、研究を深めていく。
5年生の産業の学習において、4年生までの学習をより有効に活用するための教材・授業形態を工夫していく。その際、日本と世界のつながりという点も重点の一つとしていく。
特別研究に関して、特に3学期の世界的な視野での問題解決のためのアプローチについて、さらに充実させていく。
- ② 学校行事と結びつけた効果的な学習の内容と方法の研究
林間学校・修学旅行などと、地図学習・自然地理・地誌学習との効果的な融合のさせ方について検討していく。また秋の校外授業については、4年生の上下水道、5年生の工場見学などを計画する。
- ③ 巡検（対象：5年生以上の希望者）の実施
身近な地域での地図の読図など、子ども達の主体的な取り組みを中心にして、毎年行っている。今年度は11月1日を予定している。
- ④ 作品および教材掲示の充実
スペースを最大限活用しながら、児童の作品や立体地図模型と説明文などを中心に、掲示が学習の意欲付けとなるよう心がける。

歴史科研究部の活動計画

歴史科では、4年生から3年間を通じて、歴史認識に必要なさまざまな思考力を育成することを目標としています。ただ単に知識を蓄積していくのではなく、頭の中に思い浮かべるイメージを大切に、そこから展開される歴史叙述をもっとも重視します。(脳の空間認知)

歴史学習の第1段階は、「想像力の育成」です。過去の出来事という追体験のできないことを、子ども達が思考や体験の中に持っているものの中から、イメージとして再構築することに授業の重点を置いています。具体的には、歴史学習の導入期として物語を通して楽しく達成できるように工夫しています(昔話・人物伝学習)。

次の段階として、「立場や視点を転換してとらえる思考の育成」に重点が置かれます。その時代の人間になったつもりでものを考え、歴史事象を異なった視点から対比する思考の働きです。

こういった指導は、現代的な発想や一面的な思いこみに偏らない柔軟な思考を可能にさせます。5年生での人物伝学習で、吉田松陰と井伊直弼といった対極的な立場にある人物を扱うのは、このような理由からです。

そして最終段階として、「自分なりの課題を見つけ、資料に基づいた論理的な思考」ができるようにめざしています。ここで言う「論理的思考」とは、物事の原因・結果・影響が相互に関連しながら流れていくことを認識させることです。

こういった思考を学習の中で表現するとき、概念があいまいなままに知識を並べていくのではなく、人間が主人公となって自分なりの仮説や歴史叙述ができるように、一人ひとりの特性にあった働きかけを大切に考えています。

[今年度の重点課題]

1. 「学園のあゆみ」における授業深化をめざす

「建学の精神」を子ども達に伝える……私学においては大変重要な課題です。歴史の授業では、卒業を前に人物伝として「学園のあゆみ」を取り上げてきましたが、英才教育50周年を迎え「なぜ英才教育なのか」という問いかけを教職員の中で深め、これからの50年の教育を考えていきます。

2. 課外学習の充実

特別研究を中心にフィールドワーク学習に力を入れています。今年に関しては、より広く家庭でもフィールド学習ができるように、「歴史フィールドワークのすすめ」を蓄積していきます。

3. 発表力の育成

グループで調べ学習を行い発表する、という旧来のものから、子どもなりに発表方法を工夫させ、歴史的な出来事を寸劇やコントで発表したり、クイズにしたりという指導にも力を入れています。

体育科研究部の活動計画

聖徳学園では、児童の発達に応じた指導を行い、子ども達一人ひとりの能力を最大限に発揮できるようにしています。そこで、体育科では、次のことについて指導の重点を置いています。

1・2年生については「遊び」を中心として、子ども達が体育に対して興味を示し、楽しく学習出きるような教材づくりに重点を置いて指導しています。また、3・4年生では「ゲーム」を中心としてルールを守りながら、集団スポーツの楽しさを教えていきます。5・6年生になると今まで学習してきた内容に更に技術的な内容を加えて、基礎を中心に指導しています。

この時期に技術的な内容を学習することで、高学年での発展へと結びついていきます。特に高学年になると授業での工夫が必要になり、『できるようになるためには』どうすればよいのか?などを子ども達が考えられるようにさせることが大切です。

○聖徳学園として独自性を出した体育科としてのカリキュラムづくり

子ども達の発達段階を充分把握して、教材の工夫などを中心に、子ども達の意欲づけになるような授業方法を目指しています。子どもにとって、わかりやすく、身につけやすい内容にしていきたいと思えます。

体育科行事計画

聖徳の体育行事は以下の2つを行っています。

〈運動会〉10月上旬

毎年、幼稚園と小学校と合同で運動会を行っています。内容については、体育科で検討し、できるだけ新鮮な内容を目指しています。特に児童一人ひとりが活躍できるように役割を工夫して取り組みの場を多く持たせています。

〈スキー学校〉2月中旬

3～5年を対象にして、毎年、3泊4日間のスキー学校を開校しています。場所は長野県北志賀高原にある竜王スキー場で実施しています。自然の冬の厳しさや楽しさを感じながら、高学年は技術の向上、低学年は楽しさを学びながら、スキーに慣れさせていきます。子ども達の様子を見ると、小学校時代に3回は行けることになり、かなり滑れるようになります。

〈その他〉

この他には、11月23日（祝）に東京都私立初等学校協会の私立小学校との交流として行われる体育発表会にも積極的に参加しています。

音楽科研究部の活動計画

聖徳学園では「一人ひとりの個性を育てる」、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる」、「正しい心、優しい心、たくましい心を育てる」の3つを教育目標として掲げています。音楽科ではこの目標のために、音楽への興味関心を持ち、高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする習慣と心の育成に努めています。また、音楽の基礎的な技術と表現力を発達段階に応じて育み、歌い奏でる楽しさを味わえるように留意しています。

日常の授業では主に、低学年は歌唱と鍵盤ハーモニカの演奏を、中学年は合唱とリコーダーの演奏を、高学年では合唱と合奏を中心に取り組んでいます。また、鑑賞や創作も全学年で取り入れており、鑑賞では想像力豊かに音楽を聴いて文章や発言として表現する活動を、創作では音楽的な理論を理解しながらリズムやメロディ等を作る内容を重視しています。

毎年11月に実施される聖徳祭では、外部会場の大ホールを貸し切り、クラス発表を主体とした合唱・合奏等の演奏を行っています。練習・本番ともにクラス全体が気持ちを合わせ、ひとつのものを表現する喜びを味わう姿は、音楽を通した子どもたちの大きな成長が見られる瞬間でもあります。また、他のクラスの演奏を鑑賞することで聴く力を養います。

「一人ひとりの個性」を尊重しながら集団でひとつの楽曲に取り組み、新しい音楽を創り上げるという活動は、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる」ことにも結びつき、さらには「正しい心、優しい心、たくましい心を育てる」ことへ繋がっていきます。心技体のバランスのとれた子どもの成長のために、現代において音楽という教科の持つ今日の意味・意義は、他の教科と同様に大変重要と考えています。

1. 目標、及び活動内容

様々な音楽活動を通して刺激を与え、感性を育て、基礎的な能力がバランスよく身に付くよう工夫する。また、歌唱、器楽、鑑賞、創作の4領域が持つ多面性を授業の中で効果的に生かせるようにし、それが6年間を通じて体系的に作用するよう考慮する。

2. 今年度の活動の重点

- ① 全学年の年間指導内容の精選、及び行事等での活用。
- ② 一斉指導における児童一人ひとりへの確かな技術指導、及び評価方法の研究。
- ③ 学校行事（公開研究発表会、聖徳祭等）における各学年、各クラスに適した選曲。
- ④ 外部講師を招いての特別授業の企画。（4年…リコーダー、5年…和楽器）
- ⑤ 東初協音楽部会主催音楽祭「さあ はじめよう」への参加。（4年）
- ⑥ 希望者を対象としたコンサート鑑賞会の企画。
- ⑦ 音楽特別研究では研究や創作の活動を、器楽クラブでは行事での演奏活動をしていく。

美術科研究部の活動計画

1. 目的

- (1) 各学年の発達段階に応じた課題やテーマを設定し、のびやかな感受性と豊かな創造力が獲得できるように教材を工夫していく。
- (2) 個々の児童の個性が作品に反映し、よりの確な表現で仕上げられるように個別指導を確立していく。

2. 今年度の重点項目

- (1) 個性と能力に応じた、効果的な指導を工夫、開発していく。
- (2) 美術に対して興味を湧くような教材及び指導方法を追究していく。
- (3) 落ち着いた雰囲気の中で、児童が表現に取り組めるように、授業の展開を工夫していく。
- (4) 仕上げた作品に対して、自己評価の時間を確保していく。
- (5) 校内の作品展示に接することにより、児童の美術に対する関心や興味が向上し、鑑賞の能力が養われるようにする。

3. 研究課題

- (1) カリキュラムについて
絵画表現、彫刻表現、デザイン、工作の関連性とバランスの配慮及び一貫性を持たせたテーマの展開方法を開発していく。
- (2) 各学年・クラスの実態に見合ったテーマや教材を開発していく。
- (3) 学内展示の充実。児童の作品だけでなく、古今東西の美術作品も鑑賞ができるように展示方法を改善していく。
- (4) 東京私立小学校児童作品展への参加については、本校児童の特色が表わせるテーマを追求していく。

家庭科研究部の活動計画

小学校の家庭科においては、実践的・体験的な活動や問題解決的な学習を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身につけることや、自分の成長を自覚し、家庭生活を大切にすることを育むこと、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する能力と態度を育てることをねらいとしています。

本校では5・6年生の子ども達の発達段階と生活状況を踏まえ、一人ひとりの実態に留意しながら、様々な活動に取り組んでいます。その活動に取り組む中で、特に裁縫などの実習では子ども達一人ひとりの豊かな創造力を発揮できるよう、個々が工夫できる面を数多く作り、個々の創造性に沿った指導を心がけています。

1. 目 標

- (1) 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知る。
- (2) 家族の一員としての自覚を持った生活を実感する。
- (3) 自分の成長を理解し、家庭生活を大切にすることを育む。

2. 今年度の活動方針および重点

- (1) 一人一人の児童が意欲的に取り組み、自分の家庭生活をより充実したものにしていく力を育てる。
- (2) 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知るために、出来る限り実技の時間を保障していく。
- (3) 基本的な技術は指導するが、工夫できる面は大いに個々の考えを尊重していく。
- (4) 『個』だけではなく、自分と共に生活する家族にも目を向け、『家族』という集団の大切さを意識させる。

研究発表会の歩み

研究発表会の歩み

□ 第1回 (1969年)

主 題：学校における英才教育

記念講演 「学校における英才教育」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「国語教育について」	玉川大学 教授	上 原 輝 男
「数学教育について」	早稲田大学 教授	岩 崎 馨
「知能訓練について」	英才教育研究所	清 水 驍

□ 第2回 (1970年)

主 題：学校における英才教育

○記念講演 「英才教育5年間の経過と問題点」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所 指 導 部 長	清 水 驍
「英研式知能検査法について」	英才教育研究所員	千 葉 晃

□ 第3回 (1971年)

主 題：学校における英才教育

○記念講演 「学校における英才教育の問題点」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所 指 導 部 長	清 水 驍
「知能検査の問題点」	英才教育研究所員	千 葉 晃

□ 第4回 (1972年)

主 題：小学校における知能教育

○記念講演 「小学生の知能とその教育」	英才教育研究所 所 長 代 行	清 水 驍
○研究発表 「知能診断と教育評価の関連」	英才教育研究所 研 究 部 長	千 葉 晃
○研究発表 「教科の教育と知能教育との接点」	本校 教務主任	園 田 達 彦
○研究発表 「知能教育のための教材」	本 校 教 諭	小 林 五 郎
	本 校 教 諭	郡 司 英 幸
	本 校 教 諭	成 田 幸 夫

□ 第5回 (1973年)

主 題：知能と学力

○記念講演 「本校における教育」	英才教育研究所 所 長 代 行	清 水 驍
------------------	--------------------	-------

○研究発表 「知能と学力との接点(1)」 — 知能指数と学業成績を中心にして —

本校教務主任 園田達彦

「本校における漢字指導」 本校教諭 小林五郎

□ 第6回 (1974年)

主 題：英才教育の追究 — 6年間の実践と問題点 —

○研究発表 — 各教科の実践をもとにして —

「数学科教材に対する児童の取り組み方」

本校教務主任 園田達彦

「歴史教育の方法と実践」 本校教諭 大竹良造

「思考の教材をどのように扱うか」 〃 草野修三

「空気の重さを中心にして」 〃 成田幸夫

□ 第7回 (1975年)

主 題：英才教育の追究 — 知能と学力 —

○記念講演 「現代学校と英才教育」

東京学芸大
学名誉教授 大嶋三男 先生

○研究発表 「知能と学力との接点(2)」 — 知能構造と学業成績を中心にして —

本校主事 園田達彦

○分科会研究発表

国語科 「英才児に於ける感情発達の過程」 本校教諭 草野修三

数学科 「知能因子からみた教材構造」 〃 吉井昇

理科 「理科工作教材を考える」 〃 成田幸夫

地理科 「地図と地球儀に対する児童の認識度」 〃 郡司英幸

□ 第8回 (1976年)

主 題：英才教育の追究 — 高知能児に応じた学習指導 —

○記念講演 「日本教育の課題」

国立教育研究所長 平塚益徳 先生

○研究発表 「知能と行動」

本校校務主任 小林五郎

○分科会研究発表

国語科 「文章理解の方法」 — 子どもの目に捉えられている場面映像はどのようなものか —

本校教諭 葛西琢也

数学科 「数学における英才児の特性」 本校主事 園田達彦

理科 「本校の子どもの理科に関する思考の特性」

本校教諭 成田幸夫

歴 史 「本校歴史科の授業展開」 — 因子別にみた知能の発達段階と

歴史科三段階の目標との関連 —
本 校 教 諭 大 竹 良 造

□ 第9回 (1977年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導 —

○記念講演 「英才教育について」 — 大脳生理学の立場から —

東 京 教 育 大 学
名 誉 教 授 杉 靖 三 郎 先 生

○分科会研究発表

知能教育「知能教育の必要性」 — 知能の発達過程を中心にして —

本 校 主 事 園 田 達 彦

国語科「知能と読みの接点」

本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎

数学科「数学における英才児の特性とその指導法」

本 校 教 諭 吉 井 昇

理 科「科学的な思考方法と知能因子と学習課題との関連」

本 校 教 諭 成 田 幸 夫

地理科「地理科における知能因子と学習課題との関連」

本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸

□ 第10回 (1978年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(2) —

○記念講演 「学校教育の現状と課題」 — 創造性豊かな子どもを育てるために —

筑 波 大 学 教 授 村 松 剛 先 生

○分科会研究発表

幼稚園教育「自主性を育てる遊び」

園 長 和 田 知 雄

知能教育「子どもの知能を伸ばすには」 — 意欲と集中力の育成と家庭の役割 —

本 校 主 事 園 田 達 彦

教科教育「知能開発（活用）をめざした学習指導」

本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎

特別研究「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸

□ 第11回 (1979年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(3) —

○記念講演 「生涯教育と学校」

元 文 部 大 臣 永 井 道 雄 先 生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知能教育「本園における知能教育」

教科教育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教科教育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第12回（1980年）

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(4) —

○記念講演 「これからの教育はどうあるべきか」

文部省教科調査官 渡辺富美雄先生

○研究発表 「卒業生の状況」— 追跡とその状況の分析 —

本校主事 園田達彦

□ 第13回（1981年）

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした

学習指導(5) —

○記念講演 「未来をみつめての教育」— 子どもの可能性を育てる教育 —

武蔵野音楽大学教授 大竹 武三先生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知能教育「本園における知能教育」

教科教育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教科教育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第14回（1983年）

主 題：英才教育の追究 — 英才教育15周年並びに校舎落成記念 —

低学年：知能開発をめざした学習指導(6)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(1)

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

知能教育「本園における知能教育」

国語教育「本校における国語教育」

数学教育「本校における数学教育」

理科教育「本校における理科教育」

地理・歴史教育「本校における地理・歴史教育」

英語・体育教育「本校における英語・体育教育」

□ 第15回 (1984年)

主 題：英才教育の追究

低学年：知能開発をめざした学習指導(7)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(2)

○研究発表「子どものものの見方・考え方」— 国語の授業を通して —

本校校務主任 小林 五郎

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第16回 (1985年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(1)

低学年：知能開発をめざした学習指導(8)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(3)

○研究発表「個性に応じた歴史学習」— イメージから論理的思考へ —

歴史科主任 大竹 良造

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第17回 (1986年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(2)

低学年：知能開発をめざした学習指導(9)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(4)

○研究発表「知能開発をめざした学習指導」— 地理・数学の授業から —

教 務 主 任 郡 司 英 幸

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」
低学年教育「知能開発をめざした学習指導」
高学年教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」
中学校教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第18回 (1987年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(3)
低学年：知能開発をめざした学習指導(10)
高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導(5)

○園児・児童・生徒発表

- ① 歌と合奏 幼稚園年長組 指導者 鎌田禮子、松本阿佐子
- ② 英語劇 「The King's New Clothes (はだかの王様)」〈原作アンゼルセン〉
中学2年生 指導者 米屋清貴、佐藤久美子、伊神直彦
- ③ 歌 唱 「山の歌」(夏の山、山のこもりうた、山のスケッチ、フニクリフニクラ)
- ④ 児童劇 「ほくたちの……ポチ」〈原作 梶本暁子〉
小学5年生 指導者 内藤茂、仁科建司

□ 第19回 (1988年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育
低学年：知能開発をめざした学習指導
高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

- ① 歌 唱 4年生・指導者：林谷英治
- ② 聖徳学園における英才教育

●英才教育の基本方針	本 校 主 事	園 田 達 彦
●知能教育	本 校 教 務 主 任	郡 司 英 幸
●能力に応じた指導	本 校 校 務 主 任	小 林 五 郎
●個性に応じた指導	歴 史 科 主 任	大 竹 良 造

□ 第20回 (1989年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育
低学年：知能開発をめざした学習指導
高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

① 歌 唱 3、5年生・指導者：林谷英治、関戸道成

② 児童劇 4年生・指導者：板橋裕之

③ 研究発表「聖徳学園における英才教育」

小 松 賢 司 教諭

□ 第21回 (1990年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

低学年：知能開発をめざした学習指導

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

① 研究発表「聖徳学園における英才教育」

●知能開発をめざした学習指導

葛 西 琢 也 教諭

●一人ひとりの能力や個性に応じた指導

大 竹 良 造 教諭

② 児童劇 3年生あずさ組「半日村」・指導者：松崎昭彦教諭・山本友子教諭

③ 歌 唱 4年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第22回 (1991年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

小学校：個性を生かす、その視点と方法を求めて

○全体会

① 講 演「聖徳学園の目指すもの」

— 幼稚園、小学校、中学校、高等学校の一貫教育について —

幼 稚 園 長 和 田 知 雄
小 学 校 長

② 歌 唱 4年生・指導者：林谷英治教諭

③ 歌 唱 5年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第23回 (1992年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を助長する保育Ⅱ

小学校：個性を生かす、その視点と方法を求めてⅡ

○全体会

① 講 演「聖徳学園における幼稚園と、小学校の教育」

— 幼稚園、小学校の一貫教育について —

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

- ② 研究発表「授業実践を通して『英才児』の個性を探る」

歴史科主任 内藤 茂

- ③ 歌唱 4年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第24回 (1993年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (I)

小学校：個性を生かす、その視点と方法を求めて (III)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「英才児の作文から、その個性を考える」

研究主任 葛西琢也
教務主任 草野修三

- ③ 歌唱 5年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第25回 (1994年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (II)

小学校：個性を生かす、その視点と方法を求めて (IV)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「英才児は地図をどう描くか — 子どもの空間認識と視点の転換 —」

地理科主任 松崎昭彦

- ③ 歌唱 5年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第26回 (1995年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (III)

小学校：個性を生かす、その視点と方法を求めて (V)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践
— 自由研究・特別研究を中心に —」
特別研究科主任 大河内 浩 樹
- ③ 合唱 4年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第27回 (1996年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：こどもの知能の発達を助長する遊びを求めて (IV)

小学校：英才児の創造性の開発と育成 (1)

○全体会

- ① 合唱 4年生・指導者：林谷英治教諭
- ② 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」
幼稚園長 園田 達彦
小学校長
- ③ 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践」
工作科主任 加賀 光悦

□ 第29回 (1997年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (VI)

小学校：創造的知能の開発と育成 (2)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」
幼稚園長 園田 達彦
小学校長
- ② 研究発表「創造性と学習 — 数字の実践から —」
数学科主任 松浦 博和

□ 第30回 (1998年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (VII)

小学校：創造的知能の開発と育成 (3)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」
幼稚園長 園田 達彦
小学校長
- ② 研究発表「卒業生のその後」
教務主任 草野 修三

□ 第31回 (1999年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (Ⅷ)

小学校：創造的知能の開発と育成 (4)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

② 研究発表「聖徳の英語教育」

英 語 科 主 任 藤 石 勝 巳

□ 第32回 (2000年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (IX)

小学校：創造的知能の開発と育成 (5)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

② 研究発表「歴史における概念形成のための想像力の育成」

歴 史 科 副 主 任 板 橋 裕 之

□ 第33回 (2001年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (X)

小学校：創造的知能の開発と育成 (6)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

② 研究発表「創造的知能の開発と育成 — 知能訓練の実践から —」

知 能 訓 練 科 主 任 富 永 理 香 子

□ 第34回 (2002年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (1)

小学校：創造的知能の開発と育成 (7)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「聖徳学園小学校の理科教育」

理科主任 三輪広明

□ 第35回 (2003年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導（担任）制（2）

小学校：創造的知能の開発と育成（8）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 「創造的知能の開発と育成」—— コンクール作品(作文)にみる聖徳児童の創造性 ——

国語科 内藤 茂

□ 第36回 (2004年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（3）

小学校：創造的知能の開発と育成（9）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

小学校長 園田達彦
幼稚園長

- ② 「聖徳における二人指導制」—— 一人ひとりの個性と能力に応じた指導の追究 ——

教 頭 加賀光悦

□ 第37回 (2005年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（4）

小学校：創造的知能の開発と育成（10）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長 園田達彦
幼稚園長

- ② 数学・個性的な解法 —— オープンエンドアプローチを通して ——

数学科主任 齊藤 勇

□ 第38回 (2006年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（5）

小学校：創造的知能の開発と育成（11）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 園 田 達 彦
幼 稚 園 長

② 学習発表「詩のボクシングの実践」— 英才児の個性・創造性育成の場として —

6 年 生 児 童 渡 辺 泰 介
国 語 科

□ 第39回 (2007年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（6）

小学校：創造的知能の開発と育成（12）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 園 田 達 彦
幼 稚 園 長

② 創造的知能の開発と育成研究 — 発明くふう展にみる聖徳児童の創造性 —

研 究 主 任 松 浦 博 和

□ 第40回 (2008年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（13）

個性と能力差に応じた複数指導（7）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 郡 司 英 幸
幼 稚 園 長

② 知の冒険心を育む学校図書館

司 書 教 諭 江 橋 真 弓

□ 第41回 (2009年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (14)

個性と能力差に応じた複数指導 (8)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 郡 司 英 幸
幼 稚 園

② 聖徳の理科教育について

理 科 主 任 米 持 勇

□ 第42回 (2010年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (15)

個性と能力差に応じた複数指導 (9)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園

② 聖徳の修学旅行

～子ども達が成長する5泊6日～

地 理 科 主 任 松 崎 昭 彦

□ 第43回 (2011年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (16)

個性と能力差に応じた複数指導 (10)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園

② 創造的知能の育成

～幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ～

知 能 訓 練 科 砂 廣 芳 子

□ 第44回 (2012年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (17)

個性と能力差に応じた複数指導 (11)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園 長

② 創造的知能の育成 ～豊かな視点を育てる(数学・地理の授業実践から)～
(幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ)

数 学 科 主 任 細 沼 克 吉

□ 第45回 (2013年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (18)

個性と能力差に応じた複数指導 (12)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園 長

② 未来をひらく戦士を育てるために
～一年生の学級経営を中心に～

低 学 年 主 任 由 里 敏 夫

□ 第46回 (2014年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (19)

個性と能力差に応じた複数指導 (13)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園 長

② 創造性を育むロボット教育
～特別研究数学の実践から～

教 頭 和 田 知 之

□ 第47回 (2015年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (20)

個性と能力差に応じた複数指導 (14)

○全体会

① 講 演 「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 和 田 知 之
幼 稚 園

② 研究発表 自分を知るために～聖徳の国語から～

国 語 科 川 口 涼 子

□ 第48回 (2016年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (21)

個性と能力差に応じた複数指導 (15)

○全体会

① 講 演 「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 和 田 知 之
幼 稚 園

② 研究発表 聖徳学園における 児童会活動

児童会活動・学年主任・国語科主任 板 橋 裕 之

□ 第49回 (2017年)

主 題：英才教育の追究

知能開発を目指した学習指導

考える力を育てる保育

○全体会

① 挨 拶 「英才教育の成果報告」

小 学 校 長 和 田 知 之
幼 稚 園

② 研究発表 「本校の自由研究にみられる児童の個性・創造性」

自由研究担当・数学科主任 米 持 勇

□ 第50回（2018年）

主 題：英才教育の追究

知能開発を目指した学習指導

考える力を育てる保育

○全体会

① 挨拶「英才教育の成果報告」

小 学 校 長 和 田 知 之
幼 稚 園 長

② 研究発表「学校生活で知能を伸ばす」

歴 史 科 主 任 内 藤 茂

研 究 同 人

令和元年度

〔理事長〕

岩 崎 治 樹

〔聖徳幼稚園〕

園 長 和 田 知 之

教 頭 松 浦 博 和

主 任 磯 沼 美 紀

副 主 任 伊 奈 惠 理

生活指導主任 荒 井 明 子

年 少 担 任 飯 瀨 久美子 (造形あそび・リトミックあそび)

〃 久 保 千 春 (知能あそび・体育あそび)

〃 伊 奈 惠 理 (知能あそび・体育あそび)

〃 神 山 祐 希 (リトミックあそび・造形あそび)

年 中 担 任

〃 永 坂 圭 子 (造形あそび・リトミックあそび)

〃 荒 井 明 子 (リトミックあそび・造形あそび)

〃 園 山 恵理子 (知能あそび・体育あそび・リトミックあそび)

年 長 担 任

〃 北 村 満利恵 (知能あそび・体育あそび)

〃 高 井 正 恵 (リトミックあそび・造形あそび)

〃 磯 沼 美 紀 (造形あそび・リトミックあそび)

専 科

教 諭 佐 藤 憲 夫 (体育あそび)

松 浦 博 和 (理科あそび・造形あそび)

〃 豊 田 奈都代 (知能あそび)

〃 西 谷 彩 (英語あそび)

講 師

〃 藤 原 陽 子 (英語あそび)

〃 松 浦 雅 美 (知能あそび)

〃 大 嶋 比查子 (知能あそび)

〃 上ノ宮 純 子 (預かり保育)

〃 小 池 順 子 (預かり保育)

〃 小 山 玲 子 (預かり保育)

〃 仲 田 恭 子 (預かり保育)

〃 堀 由美子 (預かり保育)

〃 伊 藤 啓 子 (預かり保育)

[聖徳学園小学校]

校長 和田 知之
教頭 松浦 博和
教頭 大河内 浩樹
教務主任 三輪 広明
研究主任 齊藤 勇
生活指導主任 川口 涼子
低学年主任 粕加屋 直幸
高学年主任 古賀 有史

担任

あずさ組 (1年生) 田中 飛鳥 (国語・家庭・知能訓練・美術)
〃 高田 叡志 (数学・地理・歴史)
やくも組 (1年生) 内藤 茂 (国語・歴史)
〃 政本 琴音 (数学・ゲーム・工作・美術)
つばさ組 (2年生) 粕加屋 直幸 (体育・ゲーム・工作)
〃 西谷 彩 (英語・数学)
みずほ組 (2年生) 佐藤 憲夫 (体育)
〃 杉村 健人 (数学・理科)
あさぎり組 (3年生) 長谷川 和暉 (国語・歴史・知能訓練)
しらさぎ組 (3年生) 明石 この実 (国語・英語・家庭)
3年学年担任 藤石 勝巳 (英語)
あさま組 (4年生) 渡辺 泰介 (国語)
ほくと組 (4年生) 米持 勇 (理科・数学)
4年学年担任 内村 勇介 (数学・体育)
のぞみ組 (5年生) 齊藤 勇 (数学・地理)
はやて組 (5年生) 渡邊 孝典 (数学・地理・体育)
5年学年担任 作左部 暉 (国語・数学・歴史)
くろしお組 (6年生) 川口 涼子 (国語・家庭)
はやぶさ組 (6年生) 古賀 有史 (英語・音楽)
6年学年担任 谷口 優 (数学)

専科

教諭 三品 亜美 (音楽)
〃 小野 和彦 (英語)
〃 高橋 まり子 (知能訓練・ゲーム・工作)
〃 豊田 奈都代 (知能訓練)
〃 富永 理香子 (知能訓練)
〃 地挽 裕子 (知能訓練)
〃 松尾 由香 (知能訓練)

〃 砂 廣 芳 子 (知能訓練)
〃 淺 利 絵 海 (知能訓練)
〃 歌 田 翔 真 (知能訓練・理科)
〃 原 皇 月 (知能訓練)
〃 中 村 沙 織 (知能訓練)

司 書 教 諭 江 橋 真 弓
養 護 教 諭 吉 村 厚 子 (保健)

講 師 板 橋 裕 之 (国語・歴史)
〃 藤 原 陽 子 (英語)
〃 細 沼 克 吉 (数学・地理)
〃 中 野 恵 子 (数学)
〃 大 嶋 比 查 子 (知能訓練)
〃 内 藤 晴 美 (知能訓練)
〃 山 田 桂 子 (知能訓練)
〃 ピーター・アッカリー (英語)
〃 須 藤 泰 規 (美術)
〃 金 子 ゆ り (美術・ゲーム工作)

テ ス タ ー 山 田 多 津 子 (知能検査)
〃 佐 藤 智 子 (知能検査)
〃 柏加屋 恵 子 (知能訓練)
事 務 次 長 萩 原 夏 美
事 務 澁 谷 香 耶 (庶務・経理)
〃 長谷川 由美子 (庶務・経理)

環 境 美 化 岩 瀬 勝 彦
〃 小 池 きみ江

第 51 回 公開研究発表会要項

発 行 日 令和元年 6 月 15 日
編集企画委員 松 浦 博 和
磯 沼 美 紀
浅 利 絵 海
発 行 者 和 田 知 之
発 行 所 聖 徳 学 園
東京都武蔵野市境南町 2-11-8
TEL (0422) 31-3839
印 刷 所 株式会社 文 伸

©2019 (800)

